

# 明庵栄西の在宋中の動静について（下）

——虚庵懷敏の天童山入寺と栄西の随侍および帰国——

佐藤孝

## 虚庵懷敏が天童山に陞住する

淳熙一六年（一一八九）に虚庵懷敏は台州（浙江省）天台県の天台山中の万年報恩光孝禅寺から明州（浙江省）鄞県東六〇里の天童山景德禅寺へと陞住している。天童山といえは、かつて栄西が訪れた阿育王山広利禅寺と並ぶ明州鄞県内の名刹であり、後には東浙（浙江省東部）第一の大刹として、南宋の禅宗五山の第三位に列している。おそらく懷敏は状況的に本師である雪庵從瑾（惟瑾とも、一一七一—一二〇〇）の後席を継ぐかたちで天童山へと遷住したものと見られ、このとき栄西も懷敏に随侍して天童山に掛搭している。『扶桑五山記』一「天童住持位次」によれば、

十五、交禅師。十六、宏智覺禅師。十七、為禅師。十八、大休珏禅師。十九、応菴華禅師。二十、慈航朴禅師。廿一、密菴傑禅師。廿二、雪菴瑾禅師。廿三、虚菴敏禅師。

となっており、十二世紀における天童山住持の変遷が知られる。十二世紀の天童山は概ね曹洞宗と臨済宗黄龍派それに臨済宗楊岐派（虎丘派）の禅者によって住持職が維持されていたといつてよい。北宋最末期に天童山の住持を勤めていたのは黄龍派の天童普交（二〇四八—一二二四）であったが、当時の天童山ははまだ修行僧二〇〇衆を擁する程度の中堅叢林にすぎなかった。北宋末南宋初の動乱期に曹洞宗の宏智正覚（宏智禅師、大覚、隰州古仏、一〇九一—一一五七）が普交の後席を継ぐようなかたちで入院開堂すると、一躍、天童山は一二〇〇衆もの修行僧を抱える大叢林へと膨れ上がっている。正覚は天童山第一六世中興として実に三〇年間にわたって化導を敷き、僧堂や千仏閣など伽藍堂宇の拡充整備にも奔走したとされる。正覚といえは坐禅を重視した黙照の禅風を振ったことで名高いが、寺の経営面の手腕にも優れており、この間、天童山はまさに曹洞宗旨一色の感

すら呈していたわけである。

宏智正覚が紹興二七年（一一五七）一〇月に示寂した直後は、宏智下の大洪法為が楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲（仏日禪師、大慧普覺禪師、一〇八九―一一六三）の推挙で第一七世を継承しており、つづいて正覚と同門に当たる真歇清了（寂庵、悟空禪師、一〇八八―一二五二）の高弟である大休宗珙（小珙、一〇九一―一二六二）が第一八世に招かれている。このように十二世紀の中葉までは正覚・法為・宗珙の三代にわたって天童山では曹洞宗旨が挙揚され、かなりの影響力をもって江南禪林に受用されていたと見られる。真歇派の宗珙はいうまでもなく入宋求法した日本の道元（仏法房、一二〇〇―一二五三）にとって法統の曾祖父に当たる禪者であり、宗珙の墓塔が立てられた天童山の南谷庵には、後に道元の本師で天童山第三二世となった真歇派の長翁如浄（浄長、一二六二―一二二七）の遺骨も奉安されている。

しかしながら、宗珙が紹興三二年（一一六二）八月に示寂して後、法孫の如浄が嘉定一七年（一二二四）秋に入寺するまで、実に半世紀以上にわたって天童山では曹洞禪者の入寺が途絶えている。しかも楊岐派（虎丘派）の応菴曇華（一一〇三―一一六三）が宗珙の後席を継いで第一九世となっているが、この人の住持期間はきわめて短期に限られていた。その後、黄龍派の慈航了朴が近隣の阿育王山広利寺から迎えられ、およそ二〇年もの長きにわたって天童山の第二〇世住持を勤めている。このとき了朴の後席を継いで阿育王山に住持したのが大慧派の普門從廓（妙智禪師、一一一九―一二八〇）であり、かつて第一次の入宋の際に栄西が重源とともに阿育王山の從廓に参じたことはすでに触れた通りである。了朴が示寂した年月日は明確でないが、応庵曇華の法嗣である虎丘派の密庵咸傑（一一八一―一一八六）がしばらく第二一世住持に就任したものの、その後は再び黄龍派の雪庵從瑾と虚庵懷敏が師資二代にわたって天童山住持を継承している。したがって、十二世紀の後半に天童山を實質的に維持管理していたのは、第二〇世の慈航了朴と第二二世の雪庵從瑾および第二三世の虚庵懷敏という黄龍派の禪者たちであったことになり、当時、黄龍派は勢力を急速に失いつつあったにも拘わらず、明州の天童山と台州天台山の万年寺を中心に法燈の孤塁を死守していたと見なければならぬ。とりわけ南宋代における天童山の歴史の上で中興である曹洞宗の宏智正覚とともに重要なはたらきをなしたのが黄龍派の了朴と懷敏なのである。しかも栄西が天童山の懷敏のもとに掛搭していた当時、杭州餘杭県西北の径山興聖万寿禪寺（もとは能仁禪院）には同じ黄龍派の塗毒智策（塗毒とも、巖主、一一七一―一二九二）が珍しくも住持として孤軍奮闘しており、『玫瑰集』巻一一〇「塔銘」に載る「径山塗毒禪師塔銘」も十二世紀末葉の黄龍派の状況を窺う上

で重要な伝記史料となっている。

いずれにせよ、十二世紀の後半に天童山が慈航了朴・雪庵從瑾・虚庵懷敏という黄龍派の諸禪者によって維持されていたことは、同じ時期に近隣の阿育王山広利寺が楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲から大円遵璞（？—一一六〇）・普門從廓さらに拙庵德光（東庵、仏照禪師、一一二一—一二〇三）へとほぼ大慧派の禪者によって維持されていたのと比較すると、きわめて対照的であったといえる。とりわけ、十三世紀に入ると、黄龍派は地を払ったかのごとく人材を欠き、ほぼ江南禅林から法統が途絶えているのであるから、そうした状況を踏まえれば、十二世紀末葉に再入宋した栄西が黄龍派の懷敏と契当し、天台山から天童山に赴くことができたのは希有なるできごとであったと見なければならぬ。

### 栄西の師翁雪庵從瑾のこと

懷敏の前住として天童山に住持していたのは、すでに触れたごとく懷敏の本師に当たる雪庵從瑾であり、栄西にとって從瑾は法統の師翁（祖翁）ということになる。栄西が万年寺で懷敏に参学していた当時、天童山は從瑾によって維持されていたわけである。その後、淳熙一六年に懷敏が天童山に入寺した際も、從瑾はいまだ健在であったことから、果して天童山の前住としてその後も寺内に留まっていたのか、他所に赴いていたのが明確でない。そのため栄西が師翁の從瑾と相見する機会が存したのか否かも興味深い課題の一つといえよう。從瑾に関しては『増集続伝燈録』卷一「四明天童雪庵從瑾禪師」の章が存しているが、上堂などの部分を省略して示すならば、つぎのごとくである。

永嘉楠溪人、俗姓鄭。礼普安院子回、為師落髮。調心聞於瑞巖、一日入室、聞拳紅爐片雪問、師擬答忽領旨。留待三年、入福州見弘智于西禪。問、甚麼處來。師曰、四明來。智曰、曾見愁布袋麼。師便喝。智便打。師接住拳云、和尚不得草草。智云、瞎漢這辺立。時心聞主江心。師歸謁、命充維那。一日問師、一喝分賓主、照用一時行、如何是一喝分賓主。師便喝。聞云、此喝是賓是主。師云、賓則始終賓、主則始終主。聞笑曰、汝又眼花了。師即呈偈云、一喝分賓主、依然又眼花、倒懸筋斗去、踏殺死蝦蟆。初住儀真靈巖。（中略）慶元六年七月二十三日、素浴更衣、書偈投筆而寂。寿八十四、臘七十。全身葬心聞塔之左。

このように『増集続伝燈録』の從瑾の章は伝記的な記事が比較的少なく、とくに開堂出世して以降の詳細についてはほとんど明らかでない。一方、從瑾の出身地の地誌である『乾隆温州府志』卷二六「仙釈（宋）」には「從瑾」の項が収録されており、

從瑾。永嘉南溪鄭氏子。初依資福院円辯問義。復參龍翔心聞、自「此生機頓発、妙用縦横。文惠公問心聞、得宗門骨髓為誰。曰、  
 瑾見地明白、輔以英資、老僧不及也。師住象山智門香燈院、鴈山能仁・龍翔凡一十一刹。每住不過三年輒去。曰、古人戒宿、  
 下、畏留情也。退居鹿園庵。年八十四、書偈而寂。世稱雪菴和尚。

という記事が見出される。そこには伝記面が比較的多く記されていることから、『増集続伝燈録』の記載と兼ね合わせることに  
 よって、從瑾の事跡はかなり解明することができる。そこで『増集続伝燈録』と『乾隆温州府志』の記事を踏まえて從瑾の事  
 跡を一通り整理して見ることにしたい。

從瑾は温州（浙江省）永嘉県楠溪の鄭氏の出身であり、示寂年時と世寿を逆算すると北宋末期の政和七年（一一一七）に出生  
 している。その後、郷里の普安院において子回を受業師として出家剃髪しており、一四歳の頃に具足戒を受けている。初めに  
 郷里の資福院の円辯に就いて修学しており、台州黄巖県の瑞巖浄土禅院に赴いて黄龍派の心聞曇貴に参じて旨を得ている。留  
 まること三年にして福州（福建省）の怡山西禅長慶寺に到って楊岐派の蓬庵端裕（仏智禅師、一〇八五—一一五〇）のもとに投じて  
 問答を交わしている。その後、曇貴が温州永嘉県の江心山龍翔寺に住持したため、そのもとに帰参して維那となり、「臨濟四賓主」  
 の問答商量によって法を嗣いでいる。『乾隆温州府志』によれば、文惠公すなわち宰相の史浩（字は直翁、真隠居士、一一〇六—  
 一一九四）に「宗門の骨髓を得たるは誰ぞ」と問われた曇貴が「瑾は見地明白にして、輔くるに英資を以てす、老僧も及ばざる  
 なり」と答え、法嗣の從瑾を第一に挙げたという逸話を載せているから、從瑾が如何に曇貴の信認を得ていたかが偲ばれる。

從瑾が開堂出世したのは真州（江蘇省）儀真県の靈巖禅寺であったとされ、その後、從瑾は合わせて一ヶ寺の住持を勤めた  
 と伝えている。ただし、住持地が判明しているのは真州の靈巖寺のほかには明州象山県の智門香燈院と温州樂清県の雁蕩山能  
 仁禅寺と温州永嘉県の江心山龍翔禅寺および明州鄞県の天童山景德禅寺であって、わずかに五ヶ寺しか知られていないのが惜し  
 まれる。『乾隆温州府志』によれば「毎に住すること三年を過さずして輒去る」とあるから、從瑾は頻繁に住持地を変えた  
 ものらしく、各寺院での住持期間はいずれも三ヶ年を越えることがなかったと伝えられる。

從瑾が示寂したのは慶元六年（一一二〇）七月二三日であり、『増集続伝燈録』によれば、このとき世寿は八四歳、法臘は  
 七〇歳であったとされ、あたかもそれまで天童山の住持を勤めていたかのごとく記載されている。しかしながら、懐敏が天童  
 山に住持した淳熙一六年には從瑾は天童山を退いていたことになり、その後、一〇年あまりの期間を從瑾が東堂として天童山

内に留まっていたのか、他山の住持として遷住したのかは定かでない。ちなみに密庵咸傑が示寂したのは淳熙一三年（一一八六）六月一二日のことであり、その後、從瑾に対して天童山から住持要請が行なわれたとすると、從瑾が天童山に入寺したのは淳熙一三年の後半か淳熙一四年（一一八七）の初めであったものと見られ、淳熙一六年に懷敏に後席を譲って天童山を退住したとすると、從瑾の天童山住持期間は三年ほどにすぎなかったことになり、まさに『乾隆温州府志』に言うところと合致している。

その後の從瑾の事跡は明確ではないが、興味深いのは『建隆温州府志』に「鹿園庵に退居す」とあり、『増集統伝燈録』の從瑾章の末尾には「全身は心聞塔の左に葬る」と伝えられていることであろう。これらによれば、從瑾は晩年に鹿園庵という隠居所に退居し、慶元六年七月に示寂した際には墓塔が本師心聞曇貫の墓塔の左に葬られたことが知られる。明代初期の史料ながら『統伝燈録』卷三三「台州万年心聞曇貫禪師」の章によれば、

台州万年心聞曇貫禪師。永嘉人。住江心。（中略）四明太守以雪竇命師主之。師辭以偈曰、開籃方喜得抽頭、退鼓而今打未休、莫把乳峰千丈雪、重來換我一双眸。

という記載が存している。曇貫は從瑾と同じ温州永嘉県の出身であり、黃龍派の無示介諶（一〇八〇—一一四八）の法を嗣いでおり、台州黃巖県の瑞巖浄土禪院に開堂出世した後、永嘉県の甌江の中洲に存する江心山龍翔禪寺に住持し、最後に天台山の万年寺に遷住している。ただし、史浩の詩文集である『鄞峰真隱漫録』卷三五「贊」には「永嘉長住長蘆心聞貫師真贊」という真贊が存しているから、曇貫は江心山龍翔寺に住持した後、真州（江蘇省）儀徵県の長蘆崇福禪院に遷住したものらしい<sup>33</sup>。その後、曇貫は長蘆寺から天台山の万年寺に遷住しており、明州奉化県の雪竇山資聖禪寺より住持就任の要請が存しても、これを辞退して万年寺に止まったことが伝えられている。こうした点を踏まえると、曇貫の墓塔は万年寺の一隅に建てられたはずであり、從瑾の墓塔もこれに隣接して存したとすれば、同じく万年寺に建てられたと解するのが自然であろう。おそらく從瑾は最晩年を万年寺で過ごしていたものと見られ、若干の推測を踏まえて考察を加えるならば、老齢に達した從瑾が天童山の住持を法嗣の懷敏に譲って、自らは懷敏と交代するかのごとく万年寺に到り、最初は住持として同じく三年ほどを勤め、その後は退住して東堂として寺内の鹿園庵に余生を送ったものではなからうか。天童山を懷敏に譲って一〇年を経た慶元六年（一一〇〇）七月二三日、從瑾は万年寺内に存した鹿園庵で最期を迎え、本師曇貫の眠る墓塔の横に葬られたものと推測しておきたい<sup>34</sup>。

從瑾が示寂したのは慶元六年七月に至ってのことであるから、榮西が在宋中に天童山と万年寺の間を往来していたとすれば、

万年寺の一角に住持ないし隠棲したのであろう。従瑾と知遇を得る機会は存したはずであろうが、文献上からその事実を確かめることはできない。後に記すごとく懐敵や栄西の活躍を「天童山千仏閣記」にまとめた楼鑰は「攻瑰集」巻八一「賛」に「雪菴瑾老賛」という従瑾に対する祖賛を残している。一方、円爾将来の「宗派図」（詳しくは「禅宗伝法宗派図」とも）には「雪庵瑾禪師」の法嗣として「覚庵勤禪師」と「天童敏禪師」の名を挙げており、従瑾の法を嗣いだ高弟として天童山の懐敵のほかにわずかに覚庵□勤の存在を伝えている。覚庵勤については何れの禪刹に住持したのかも定かでないが、従瑾の法嗣として懐敵とともに十二世紀後半から十三世紀初頭の頃にそれなりに黄龍派の孤塁を守って活動していた禅者であったと見られる。

### 天童山における虚庵懐敵の活動

虚庵懐敵が天台山の万年寺から明州の天童山景德寺に第二三世として陞住したのは淳熙一六年（一一八九）のことであったとされる。『元亨釈書』の栄西伝には「淳熙之末、菴移天童」とあり、「明菴西公禪師塔銘」にも「淳熙末、虚菴移天童」と記されているから、淳熙年間（一一七四—一一八九）の末年に懐敵が天童山に遷住したことを伝えている。楼鑰の『攻瑰集』巻五七「記」の「天童山千仏閣記」には、天童山に住持した懐敵と随侍した栄西に関わる記事が収められている。

十六年、虚庵懐敵、自天台山万年来、主是刹、百廢具舉、追跡二老。而千仏之閣、歳久浸圯、且将弗支、猶以前人規模、为未足以称上賜、欲從而振起、更出旧閣及前二閣之上、僉以為難。師之志不回也。先是、日本国僧千光法師榮西者、憤發願心、欲往西域求教外別伝之宗。若有告以天台万年為可依者、航海而來、以師為婦。及遷天童、西亦隨至。居歲餘、聞師有改作之意、請曰、思報摂受之恩、糜軀所不憚、況下此者乎。吾忝国主近属、他日帰国、当致良材以為助。師曰、唯。

このように「天童山千仏閣記」には「淳熙」十六年、虚庵懐敵、天台の万年より来たり、是の刹を主るとあって、懐敵が万年寺より天童山に入寺したのを明確に淳熙一六年であったと伝えている。ただし、懐敵が天童山に住持したのが具体的に淳熙一六年の何時であったのか、残念ながら楼鑰は月日までは書き残していない。

また「天童山千仏閣記」には、懐敵が天童山に住持したことにつづけて「百廢具に挙げ、二老を追跡す」と記されている。ここにいう二老とは天童山の第一六世中興であった曹洞宗の宏智正覚と第二〇世であった黄龍派の慈航了朴のことであり、正覚と了朴は天童山の歴史において長期にわたって住持を勤め、伽藍の整備や宗旨の充実などに尽力した禅者として特筆されて

いる。しかも「百廢具に挙ぐ」とあるから、懷敏は正覺と了朴の二禪者を追慕し、やはり彼らと同じように天童山内の伽藍の修復や整備に意を注ぎ、土木事業も行なったものであろう。このとき懷敏が天童山内の如何なる伽藍を修復したのか、随侍した榮西が天童山でどのように懷敏を補佐していたのかは記されていない。

そんな中で懷敏は天童山内に存した千仏閣を修復したい旨を榮西に告げている。千仏閣は千仏宝閣とも称し、天童山内の山門近くの一角に存した樓閣である。紹興四年（一一三四）に曹洞宗の宏智正覺が創建したものであり、高閣を建てて両廊には千仏を鑄出し、前の二池の間に七塔を建てた壮麗なものであったとされる。「天童山千仏閣記」によれば、懷敏には創建されてから六〇年を経た千仏閣を改作修復したい意が存したとされ、そんな懷敏の意図を知った榮西は「撰受の恩に報いんと思ひ、軀を糜やして憚からざる所、況んや此れに下れん者か。吾れ国主の近属を忝くす、他日、国に歸らば、当に良材を致して以て助を為すべし」と懷敏に告げたとされる。榮西としては懷敏から黃龍派の法門を授受されたことに對する深恩を感じ、後日、日本に歸つたならば、良材を送つて千仏閣修復の手助けをしたいと告げているわけである。このとき懷敏は榮西の申し出に對して満足の意を示して「唯」と頷いたと記されている。

懷敏が天童山の住持を勤めていた期間がどれほどであったのは定かでないが、少なくとも榮西が歸国して後も、しばらくの間は住持として天童山に化導を敷いていたものと見られ、千仏閣の修復に尽力していたことが伝えられる。

### 天童山と万年寺を往来した榮西の活動

懷敏が天童山に遷住した際、榮西は懷敏に随侍して同じく天童山に赴いており、悟後の修行ともいうべき研鑽に努めている。『元亨釈書』の榮西伝には「淳熙之末、菴移天童」につづいて「西亦行補助多矣」とあり、「明菴西公禪師塔銘」にも「淳熙末、虚菴移天童」につづいて「師亦随之」と記されていることから、淳熙一六年（一一八九）に懷敏が天童山に遷住した際、榮西は行動を共にして懷敏に随侍して天童山に到り、懷敏の学人接化などを補助すること多大であったと伝えてゐる。興味深いのは懷敏に随侍して天童山に移つてまもない頃、淳熙一六年に榮西は『出家大綱』の草案をなしていることであろう。『出家大綱并序』の榮西の自序によれば、榮西は二二歳の頃より満五〇歳に至るまで『出家大綱』の構想を練りつづけていたことを自ら書き残している。すなわち、建久六年（一一九五）一〇月一日に榮西が著した『出家大綱』の自序に、

於此、榮西在唐之日、伺<sub>レ</sub>聖教<sub>レ</sub>録<sub>二</sub>律畧<sub>一</sub>歸<sub>二</sub>日本<sub>一</sub>。即知<sub>二</sub>時視<sub>一</sub>機宜、方勸<sub>二</sub>齋戒<sub>一</sub>。隨<sub>レ</sub>勸皆<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>之、喜<sub>レ</sub>哉<sub>二</sub>千萬<sub>一</sub>矣。始<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>二十一<sub>一</sub>歲、至<sub>二</sub>于滿五十<sub>一</sub>歲、斗<sub>レ</sub>藪<sub>二</sub>兩朝<sub>一</sub>三十餘年、不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其<sub>レ</sub>感<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>。今<sub>レ</sub>既<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>感<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>、群<sub>レ</sub>機<sub>二</sub>皆<sub>レ</sub>從<sub>一</sub>。仍<sub>レ</sub>統<sub>二</sub>在唐<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>録、併<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>以<sub>レ</sub>貽<sub>二</sub>於<sub>レ</sub>末<sub>レ</sub>世<sub>一</sub>。若<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>持<sub>二</sub>齋<sub>レ</sub>戒<sub>一</sub>者、宜<sub>レ</sub>從<sub>二</sub>此<sub>レ</sub>勸<sub>一</sub>。出家要如<sub>レ</sub>斯。時建久六年乙卯歲初十月乙卯建十日辛酉、喪<sub>二</sub>孝<sub>レ</sub>愆<sub>一</sub>裏<sub>レ</sub>謹<sub>レ</sub>叙。

とあり、榮西は二度目の在宋中に『出家大綱』の構想を練っていたことが知られ、齋戒を持することを勧めている。榮西が二一歳であったのは日本の応保元年（一一六一）に当たり、五〇歳であったのは南宋の淳熙二六年（一一八九）であり、満五〇歳とすれば紹熙元年（一一九〇）ということになり、日中兩朝で実に三〇余年にわたって文案を推敲しつづけていたことになろう。在宋中の榮西にとつて天台山や天童山での一時は著述の構想を思案するには最適な環境であったものと見られる。また榮西は『出家大綱』の跋文を著した際に自ら「喪<sub>二</sub>孝<sub>レ</sub>愆<sub>一</sub>裏、謹<sub>レ</sub>んで叙す」と述べており、建久六年一〇月に母の喪に服していたことが知られる。この点で興味深いのは『続古今和歌集』巻一〇「羈旅歌」に榮西が詠じた作として、

もろこしにわたりて侍ける時、秋の風身にしみける夕、日本にのこりともりける母の事など思てよめる。  
 もろこしの、稍もさびし、日のもとの、ははその紅葉、散やしぬらん。  
 權僧正榮西。

という一首の和歌が伝えられていることであろう。榮西がこの和歌を詠じた時期は定かでないが、「日本にのこりともりける母」と記されているから、榮西が第二次在宋中に詠じた作であるとしてよく、おそらく天台山か天童山で本師の懐敏に参侍していたとき、秋の風が肌身に冷たく感じる紅葉の頃に日本に残してきた老母のことを思つて詠じた一首であろう。あるいはこの和歌を詠じたのは『出家大綱』の草案をなした時期と重なっているのかも知れない。老母は榮西が帰国した後、建久六年（南宋の慶元元年）に至つて逝去しているものらしい。建久二年には榮西は五五歳に当たつているから、このとき老母は七五歳前後には達していたものと見られ、榮西が在宋中には七〇歳前後であった計算になろう。

また先の『出家大綱』の跋文で、いま一つ注目されるのが「仍りて在唐の記録に続けて、併せて書して以て末世に貽す」と記されていることであろう。この記述によるならば、榮西には在宋中の動静を書き記した日記の類いが存したもののようであり、おそらく榮西は在宋中に懐敏と交わした問答や日々に見聞したできごとなどを逐一に「在唐記」といった体裁でまとめたものと見られる。こうした貴重な記録が現今に伝えられていたならば、榮西在宋中の動向はより詳細に辿ることができたはずである。



榮西は懐敵と行動を共にして天童山に随侍しているが、この頃になると天童山の懐敵のもとにのみ留まっていたわけではなく、天童山の内外でかなり自由な行動が許されていたものらしい。とくに比較的距離が近い天台山の万年寺との間を往来することはしばしば存したもののようであり、師翁の雪庵從瑾が万年寺の住持として健在であったとすれば、榮西としても心強いものが存したはずであろう。大東急記念文庫に所蔵される金剛仏子榮西録『秘宗隱語集』の奥書によれば、

治承五年辛丑五月八日、日本国上都平城達智門入唐比丘榮西、決并書。

宋紹熙元年庚戌九月日、於天台山万年寺再治、遣之本國門徒、宜知之。

と記されており、榮西が日本の治承四年（一一八〇）五月に書した『秘宗隱語集』を携帯して入宋し、紹熙元年（一一九〇）九月に万年寺において「日本国上都平城達智門入唐比丘榮西」の肩書きでこれを再治している。紹熙元年といえ、榮西が懐敵に随侍して天童山に到って以降のことであるから、このとき榮西は天童山を離れて万年寺に赴いていたことになろう。しかも「之れを本国の門徒に遣わす」とあるから、榮西は再治した『秘宗隱語集』をそのまま天台山から日本の門徒のもとへと送り届けていることになろう。第二次入宋では榮西は単独で行動したのではなく、随侍した門弟なども存したようであるから、おそらくこのとき榮西は門人の誰かに『秘宗隱語集』を託して日本に向かわせているのかも知れない。

この点、いま一つ興味深いのは、同じ紹熙元年（日本の建久元年）に榮西が台嶺すなわち同じ天台山から日本に菩提樹を送っていることであろう。『元亨釈書』の榮西伝によれば、

（建久）六年、創聖福寺于筑之博多。此春、分天台山菩提樹、栽東大寺。初西在台嶺、取道邃法師所栽菩提樹枝、付商船、種筑紫香椎神祠、建久元年也。西以謂、吾邦未有此樹、先移一枝于本土、以驗我佛法中興之効。若樹枯槁、吾道不作。蓋菩提樹者、如来成道之靈木也。世尊滅後一百年、師子國王受仏記、共仏舍利得南枝、盛金甕移植。南宋之始、求那跋陀羅始栽廣府。其後、遼師分台峯。是以、西為法信寄來。建東大寺復、勅以此木移焉。元久之始、西又取台枝、栽建仁東北隅。兩処茂盛、垂蔭數畝、至今繁焉、天下分栽。

という記事が記されている。これは榮西が建久元年に天台山の菩提樹の一枝を商船に付して日本に移植したことを伝える内容である。天台山の菩提樹はもともと唐代に天台宗の道邃（興道尊者、止観和尚、？—一八〇五）が植えたものとされ、道邃はいままでもなく入唐した日本の最澄（伝教大師、六六七—八二二）が天台学を学んだ本師として知られている。榮西は道邃手植えの菩提

樹の一枝を日本に送っているのであり、やがてその一枝は建久元年内に筑紫（福岡県）の香椎宮（香椎神社）に植えられたとされる。建久六年（一一九五）の春に至って、栄西は博多の安国山聖福寺に在って、この香椎宮の菩提樹をさらに奈良（南都）の東大寺にも分ちち植えている。また元久年間（一二〇四—一二〇六）の初めには京都東山建仁寺の東北隅にもその一枝を植えたことが記されている。仏陀成道の霊木とされる菩提樹に寄せる栄西の並々ならぬ思いが窺われ、こうして天台山の菩提樹は日本の各地に移植されて茂ることになったものらしい。

これらの記事はすでに栄西が懐敵に随侍して天童山に赴いて以降のできごとであるから、この間、栄西は天童山と万年寺の間を往来することがしばしば存したと解さなければならぬ。天童山と万年寺は片道わずか数日で移動できる距離にあり、栄西がどちらに居たとしてもそれほど違和感はないであろう。しかも自著の再治を行なっているわけであるから、ある程度の期間、半月なり一ヶ月なりを万年寺に滞在することも十分に存したものと推測される。このように見るならば、栄西は天童山では師匠の懐敵に参随し、万年寺では師翁の従瑾のもとで種々の活動をなし、頻繁に両寺を往来していたものである。

さらに鎌倉の鶴岡八幡宮には、栄西が南宋の地から持ち帰ったとされる「長命富貴堆黒箱」一合が所蔵されている。これは南宋代の木製漆塗りで、縦一九・五センチ、横一九・七センチ、高さ一二センチの黒箱であって、厚く塗り重ねた漆層を削り込み、全面にも透を施したものである。底裏に朱漆で「贈日本客僧栄西禅师。明昌元、侍郎周宏」という銘文が書かれているから、侍郎の周宏が日本の客僧栄西に贈ったものであることが知られる。ただし、侍郎の周宏が具体的に誰なのか定かでない上に、明昌元年（日本の建久元年、一一九〇）が南宋と対峙していた金国の年号である点が問題とされている。周宏が金国の官僚でこのとき何らかの事情で南宋国内の明州に到り、たまたま日本僧栄西と知り合う機会を得たのかも知れないが、現在のところ、詳しい事情や背景は何ら辿れないのが実情である。

### 虚庵懐敵が栄西に付与した偈頌

また天童山の懐敵が嗣法門人である栄西に付与したとされる偈頌の文面が伝えられている。『黄龍十世録』の「慶元府天童虚庵懐敵禅师」の章には「偈寄千光法師」という付法偈が載せられており、これは『鄰交徵書初篇』卷二「詩文部（宋）」にも収められているから、かつて懐敵が栄西に付与した伝法偈として珍重されていたものであろう。原本にはおそらく懐敵の落款

が押され、年月日なども記されていたはずであり、中国黄龍派の貴重な墨蹟であつただけに散逸しているのが惜しまれよう。すなわち、『黄龍十世録』の「慶元府天童虚庵懷敵禪師」の章の末尾に、

偈寄<sub>二</sub>千光法師<sub>一</sub>。住<sub>二</sub>太白名山<sub>一</sub>虚庵懷敵。

不露<sub>二</sub>鋒鋦<sub>一</sub>意已彰、揚<sub>二</sub>眉早墮<sub>一</sub>識情郷。著衣喫飯自成現、打<sub>二</sub>瓦鑽<sub>一</sub>龜空著忙。若信<sub>二</sub>師姑元女子<sub>一</sub>、無疑<sub>二</sub>日本即南唐<sub>一</sub>。一天月色澄<sub>二</sub>江上<sub>一</sub>、底意分明不<sub>二</sub>覆藏<sub>一</sub>。

という「偈を千光法師に寄す」と題した偈頌が載せられている。「太白名山に住する虚庵懷敵」とあるから、天童山（太白峰）の住持であつた懷敵が千光法師榮西に寄せた偈頌であることが明記されている。『鄰交徵書初篇』卷二「詩文部（宋）」にも、

与<sub>二</sub>榮西<sub>一</sub>。懷敵。

不<sub>二</sub>露<sub>一</sub>鋒鋦<sub>二</sub>意已彰<sub>一</sub>、揚<sub>二</sub>眉早墮<sub>一</sub>識情郷。著衣喫飯自成現、打<sub>二</sub>瓦鑽<sub>一</sub>龜空著忙。若信<sub>二</sub>師姑元女子<sub>一</sub>、無疑<sub>二</sub>日本即南唐<sub>一</sub>。一天月色澄<sub>二</sub>江上<sub>一</sub>、底意分明不<sub>二</sub>覆藏<sub>一</sub>。〔靈洞院古写本〕。

として同様の偈頌が収められている。ただし、『鄰交徵書初篇』では表題が「榮西に与う」となっており、詠じたのも単に「懷敵」と記されるのみで肩書きは付されていない。しかも「靈洞院の古写本なり」という付記が添えられており、この偈頌の古写本が建仁寺の塔頭の一つ靈洞院に所蔵されていたことを伝えている。靈洞院とは建仁寺山内に存する法燈派の高山慈照（初名は心鏡、広濟禪師、一二六六—一三四三）の塔頭であり、慈照は法燈派祖の無本覚心（心地房、法燈円明国師、一二〇七—一二九八）の高弟であり、南北朝初期に建仁寺第二六世として活躍している。ただし、懷敵が榮西に与えた墨蹟がなぜ法燈派の靈洞院に所蔵されていたのかは定かでない、靈洞院に所蔵されていたものが懷敵の直筆であつたのか否かも明らかでない。靈洞院の室内にこの古写本が現在も所蔵されているのか否か、いまだ確認を取っていない。この墨蹟の表題が果して「偈を千光法師に寄す」であつたのか、単に「榮西に与う」であつたのか、懷敵の署名が「太白名山に住する虚庵懷敵」であつたのか、単に「懷敵」であつたのかは明確でない。懷敵の直筆の原本が現存していれば、何れが正しいかも判明し、落款なども押されていたことであろうから、黄龍派の中国禪僧の貴重な墨蹟として珍重されたはずであろう。少なくとも『黄龍十世録』ではこの偈頌は天童山の住持として懷敵が榮西に付与したものと解しているわけである。

いま、この偈頌の本文を書き下して見るならば、およそつぎのごとくなるう。

鋒鋸を露わさずして意已に彰らかなるに、眉を揚ぐれば早や識情の郷に墮つ。著衣喫飯自ら成現するに、瓦を打ち亀を鑽りて空しく着忙す。若し師姑は元より女子なるを信ぜば、日本は即ち南唐なることを疑う無かれ。一天の月色、江上に澄み、底意分明にして覆藏せず。

鋭い機鋒を示さなくても宗旨はもともと明らかであるのに、眉を挙げて推し量ろうとすると迷いの世界に落ち込んでしまう。衣服を着たり粥飯を喫する日常の行為に仏法がはつきりと現成しているのに、瓦を割り亀の甲羅を焼いて占うごとく人は空しく慌てふためてしまう。もし尼僧がもともと女性であると信じ切れれば、日本がそのまま南宋であることを疑ってはならぬ。天上の月が川面に清らかに映じているように、仏法の真理は常に現前して何の隠し立てもないのである。およそ「偈寄千光法師」ないし「与栄西」の偈頌は以上のように解せられよう。この偈頌に示されているように、懐敞は門下に留まって研鑽に努めた日本僧栄西が真に仏法を体現していることを認め、印可証明の語として七言八句の偈頌を付与しているわけである。いわば、この偈頌は天童山の住持として懐敞が栄西を正式に印可証明した付法の偈頌すなわち伝法偈であったと見てよいであろう。

### 虚庵懐敞が栄西に付与した相承物

久しく懐敞のもとに在って宋朝禅の修行に努めた栄西は、やがて天童山を辞去して日本に帰国することになる。『元亨釈書』の栄西伝には、その間の動向について、

紹熙二年秋、辞菴。菴付僧伽梨。書曰、日本国千光院大法師、宿有靈骨、洪持此法。不遠万里、入我炎宋、探蹟宗旨。乾道戊子、遊天台、見山川勝妙、生大歡喜。至石橋、焚香煎茶、礼住世五百大羅漢。尋反本国、夢境恰恰。二十年雖音問不繼、而山中者宿、歷歷記其事。今又再遊此方、相從老僧、宿緣不淺、志操可貴、不得示法旨。昔釈迦老子、將円寂、以正法眼藏涅槃妙心、付屬摩訶迦葉。二十八伝而至達磨、六伝而至曹溪。又六伝而至臨濟、八伝而至黃龍、又八伝而至予。今以付汝、汝當護持。佩此祖印、皈國布化、開示衆生、繼正法命。又達磨始伝衣而來、以為法信。至六祖止不伝。汝為外國人、故我授此衣為法信、則乃祖耳。先是在万年日、敞語曰、菩薩戒禪門一大事也。汝航海來、問禪於我、因而付之。及応器・坐具・宝餅・拄杖・白扠、其因迦文已下二十八祖達磨以來至虚菴、嫡嫡相承、不括横枝、五十三世系連明歟。

と伝えている。この記載も天童山の懐敞が書き記して栄西に与えた文書を伝えている点で貴重であることから、つぎに懐敞が

語った部分を書き下して示しておきたい。

紹熙二年（一一九二）の秋、菴を辞す。菴、僧伽梨を付し、書して曰く、「日本国の千光院大法師、宿に靈骨有り、洪いに此の法を持す。万里を遠しとせず、我が炎宋に入りて、宗旨を探隨す。（中略）今又た再び此の方に遊びて、老僧に相い従う。宿縁浅からず、志操貫ぶべし。法旨を示さざるを得ず。昔、釈迦老子、將に円寂せんとして、正法眼藏・涅槃妙心を以て、摩訶迦葉に付属す。二十八伝して達磨に至り、六伝して曹溪に至る。又た六伝して臨済に至り、八伝して黄龍に至り、又た八伝して予に至る。今以て汝に付す、汝当に護持すべし。此の祖印を佩びて、国に販りて化を布き、衆生に開示し、正法の命を継げ。又た達磨、始めて衣を伝えて来たり、以て法の信と為す。六祖に至りて止めて伝えず。汝は外国の人爲り、故に我れ此の衣を授けて法の信と爲し、乃祖に則るのみ」と。

このように『元亨釈書』の榮西章によれば、別れに際して懷敵は僧伽梨を付し、さらに伝法の語を書している。榮西は実際に懷敵から直筆の相承書を授与されているはずであろうが、残念ながら懷敵直筆の墨蹟は現今に伝えられていない。

この『元亨釈書』の記事はもともと『興禅護国論』の記載を受けるものであり、『興禅護国論』巻中「第五宗派血脈門」には、摩訶迦葉より菩提達磨に至る西天二十八祖を挙げた後、東土（中国）における相承を記して、

第二十九可大師・第三十璨大師・第卅一信大師・第卅二忍大師・第卅三能大師・第卅四讓大師・第卅五一大師・第卅六海禪師・第卅七運禪師・第卅八玄禪師・第卅九獎禪師・第四十顯禪師・第四十一沼禪師・第四十二念禪師・第四十三昭禪師・第四十四円禪師・第四十五南禪師・第四十六心禪師・第四十七清禪師・第四十八卓禪師・第四十九謀禪師・第五十賁禪師・第五十一瑾禪師・第五十二敵禪師・第五十三榮西」という直系の血脈すなわち単伝宗派図（嗣書）の写しが載せられている。ここで興味深いのは六祖慧能（盧行者、大鑑禪師、六三八―七一三）まででなく、南嶽懷讓（大慧禪師、六七七―七四四）と馬祖道一（馬大師、大寂禪師、七〇九―七八八）も「大師」と表記され、百丈懷海（大智禪師、七四九―八一四）より虚庵懷敵まで「禪師」の語が付されており、榮西自身は法諱のみで書されていることである。

さらに同じく「第五宗派血脈門」には、榮西が紹熙二年七月に帰国の途に着くとき、懷敵が榮西に語ったことばとして、

遂宋紹熙二年辛亥歲（日本建久二年）秋七月、帰国。臨別禪師爲書曰、日本国千光院大法師（西）、宿有靈骨、頓捨世間深重恩愛、從<sub>レ</sub>仏剃髮、著<sub>レ</sub>僧伽梨、洪持此法。不<sub>レ</sub>遠万里、航<sub>レ</sub>海而入<sub>レ</sub>我炎宋、探<sub>レ</sub>蹟宗旨。乾道戊子歲、遊天台、見<sub>レ</sub>山川国土勝妙道場清淨殊特、生<sub>レ</sub>大歡喜、嘗施<sub>レ</sub>淨財、供<sub>レ</sub>十方学般若菩薩。已而至<sub>レ</sub>石橋、拈<sub>レ</sub>香煎茶、敬<sub>レ</sub>礼住世五百大阿羅漢。尋復<sub>レ</sub>本国、夢境恰恰二十年、

雖音問不<sub>レ</sub>相聞、而山中老宿歷歷記其事。今又懷<sub>レ</sub>旧遊復<sub>レ</sub>之、宿縁不<sub>レ</sub>淺、志慙茲深。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>法旨。昔釈迦老人、將欲<sub>レ</sub>円寂時、以<sub>レ</sub>涅槃妙心正法眼藏、付<sub>レ</sub>屬摩訶迦葉、乃至嫡嫡相承、至於<sub>レ</sub>予。今以此法付<sub>レ</sub>屬汝、汝當<sub>レ</sub>護持。佩<sub>レ</sub>其祖印、歸<sub>レ</sub>国布化末世、開<sub>レ</sub>示衆生、以<sub>レ</sub>繼<sub>レ</sub>正法之命。又授<sub>レ</sub>汝袈裟、大師昔<sub>レ</sub>傳衣為<sub>レ</sub>法信、而表<sub>レ</sub>本來無物。然至<sub>レ</sub>六祖衣止不<sub>レ</sub>傳、云云。其風雖<sub>レ</sub>絶、今為<sub>レ</sub>外国法信、授<sub>レ</sub>汝僧伽梨而已。又授<sub>レ</sub>菩薩戒、拄杖・応器・衲子道具、不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>一付屬畢。聞<sub>レ</sub>伝法偈、云云。此宗自<sub>レ</sub>六祖以降、漸分<sub>レ</sub>宗派、法周二海。世泊<sub>レ</sub>二千、脈流<sub>レ</sub>五宗。謂、一法眼宗、二臨濟宗、三瀉仰宗、四雲門宗、五曹洞宗也。今最盛是臨濟也。自<sub>レ</sub>七仏至于<sub>レ</sub>栄西、凡六十代也。嫡嫡相承<sub>レ</sub>脈、寔<sub>レ</sub>弘法之公驗有<sub>レ</sub>以者也。是只<sub>レ</sub>列<sub>レ</sub>一轍、自餘支派在<sub>レ</sub>図、謂<sub>レ</sub>之宗派血脈門<sub>レ</sub>矣。

とあり、菩薩戒を受けたことと、拄杖・応量器や禪僧としての道具を授けている。先の『元亨釈書』の記事のもとになった内容であり、栄西自身が懐敵の相承書をもとに書き残したものである。また五家の宗派を挙げて、臨濟宗が最も盛んであることを述べているが、黄龍派と楊岐派の別などについては触れられていない。

先の伝法偈とともにこの懐敵が栄西に与えた相承書も建仁寺裏に貴重な什物として所蔵されていたはずであろうが、おそらく火災などで失われたものと見られる。懐敵の相承書の写しによれば、栄西が第一次の入宋で天台山を訪れて石橋に香を焚いて五百羅漢に茶を献じた故事が二〇年を経ても山中の著宿の間で語り継がれていたことが知られ、その栄西が再び天台山を訪れて懐敵の膝下で臨濟宗旨を究めたことが特筆されている。また栄西が外国人であることから、懐敵はあえて法信のために伝法衣を付与したと、さらに応量器・坐具・宝瓶・拄杖・白毛扠子および西天東土の五三世に及ぶ血脈（単伝宗派図）をも伝法の証しとして授与したことが語られている。また「自餘の支派は図に在り」と記されているから、直系の血脈すなわち嗣書の類いとは別に、当時の主な禅宗諸派の系譜を記した「宗派図」なども栄西は懐敵から相承されていることになろう。もし、この「宗派図」の類が現存していたならば、黄龍派の懐敵の側からとらえられた十二世紀末葉の中国禅宗の趨勢が明確になったはずであろう。

一方、栄西が懐敵から付与された相承物について、明代初期（日本の室町中期）に著された「明菴西公禪師塔銘」では、

紹熙二年秋、辞<sub>レ</sub>虚菴。菴付<sub>レ</sub>伽黎、并書曰、日本千光大法師有<sub>レ</sub>靈骨、弘<sub>レ</sub>持此法、不<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>万里、入<sub>レ</sub>我炎宋、探<sub>レ</sub>蹟宗旨。尋返<sub>レ</sub>本国、夢境恰<sub>レ</sub>二十年、今又再遊<sub>レ</sub>此方、相<sub>レ</sub>從老僧、宿契不<sub>レ</sub>淺、志操可<sub>レ</sub>貴。不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>法旨。昔釈迦老子、將<sub>レ</sub>示<sub>レ</sub>滅時、以<sub>レ</sub>正法眼、付<sub>レ</sub>大迦葉。二十八伝而至<sub>レ</sub>達磨、六伝而至<sub>レ</sub>曹溪、又六伝至<sub>レ</sub>臨濟、八伝至<sub>レ</sub>黄龍、又八伝而至<sub>レ</sub>余。今以<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>汝、汝當<sub>レ</sub>護持。佩<sub>レ</sub>此祖印、歸<sub>レ</sub>国布化、

開示衆生、繼正法命。故伝衣以為法信、汝当為東国之祖。遂辞菴帰国。廼建久二年、師年五十一。

と記されており、『興禪護国論』『元亨釈書』の内容とは微妙に相違させている。同じように書き下してみれば、

紹熙二年の秋、虚菴を辞す。菴、伽黎を付し、並びに書して曰く、「日本の千光大法師、靈骨有り、此の法を弘持し、万里を遠しとせず、我が炎宋に入り、宗旨を探蹟す。尋いで本国に返り、夢境にあること恰かも二十年、今又た再び此の方に遊び、老僧に相い従う、宿契淺からず、志操貫ぶべし。法旨を示さざるべからず。昔、釈迦老子、將に滅を示さんとする時、正法眼を以て大迦葉に付す。二十八伝して達磨に至り、六伝して曹溪に至り、又た六伝して臨済に至り、八伝して黄龍に至り、又た八伝して余に至る。今以て汝に付す、汝当に護持すべし。此の祖印を佩びて、国に歸りて化を布き、衆生に開示し、正法の命を継げたまえ。故に衣を伝えて以て法の信と為さん。汝当に東国の祖と為るべし」と。遂に菴を辞して国に歸る。廼建久二年、師の年は五十一なり。

といった具合になろう。このように「明菴西公禪師塔銘」でも『元亨釈書』の記載を受けて懐敵のことは伝えてはいるが、とくに相違するのは「汝当<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>東国之祖」の一語が付されていることであり、後世、榮西は日本禪宗の始祖としての地位が与えられるようになる。

### 天童山を辞して帰国する

榮西が天童山の懐敵のもとを辞して帰国の途に着いたのは、南宋の紹熙二年（日本の建久二年、一一九二）秋七月のことである。『興禪護国論』巻中「第五宗派血脉門」には明確に「遂宋紹熙二年辛亥歲（日本建久二年）秋七月帰国」とあるから、榮西は紹熙二年秋七月に日本に向けて帰国の途に着いたことが知られる。この点、『元亨釈書』の榮西伝では単に「紹熙二年秋、辞菴」とあり、一方で「西趨出、到奉国軍（今改慶元府）、乗揚三綱船、著平戸島葦浦。本朝建久二年辛亥也」とも記されている。「明菴西公禪師塔銘」では「紹熙二年秋、辞虚菴（中略）遂辞菴帰国。廼建久二年、師年五十一」と記されている。

これらによれば、榮西は秋七月に天童山の懐敵の席下を辞して急いで明州の港に赴いたものらしく、とくに『元亨釈書』では「奉国軍（今は慶元府と改む）に到り、揚三綱の船に乗り、平戸島の葦浦に著く。本朝の建久二年辛亥なり」とその行程を書き記している。奉国軍とは明州のことであり、唐宋代に奉国軍節度が置かれ、慶元元年（一一九五）に慶元府と改められている。また揚三綱とは榮西が帰国する際に便乗した船の持主であり、日宋間を往来していた博多在住の海商であったと見られる。

おそらく栄西は七月中には日本の地を踏んだものと見られ、着岸したのは筑前（福岡県）平戸島の葦浦であったとされる。ところで、興味深いのは『元亨釈書』の栄西伝に、

初良辯誘西。一夕夢、西自宋国帰齋。白米、普種諸州。覺後改悔、称揚帰降。間有誹者、辯曰、勿言、西公非汝等毀譽境界。

という記事が存していることである。これは帰国した栄西を誹謗した筑前宮崎の良辯に関わる記事であり、初め栄西を排撃していた良辯がやがて栄西に帰順したことを語る一段である。そこに栄西が宋国より帰る際に白米を齎し、それが日本国内の諸州に植えられたという逸話が伝えられている。これが史実であれば、栄西は南宋の浙江の地から何らかの新米を齎していることになり、日本文化史上においても注目される内容といえる。さらに同じく『元亨釈書』の栄西伝には、

建久三年、於香椎神宮側、構建久報恩寺、始行菩薩大戒布薩。

とあり、栄西が帰国してまもない建久三年（一一九二）に筑前の香椎神宮の傍らに建久報恩寺を創建し、初めて菩薩大戒の布薩を行ない、集まった道俗に禪宗の菩薩戒血脈を授与したことが伝えられている。これは日本に戻って拠点寺院を創建した際、栄西が黄龍派の懐敵から伝持された臨済宗所伝の「仏祖正伝菩薩戒」を人々に付与したことを語るものであり、いわゆる禪宗の授戒会を初めて挙行して血脈を授与したことを意味しよう。

### 栄西が南宋で見聞した記事

栄西はその著作の中で随処に南宋の地内や禅刹などで見聞した記事を載せていることから、それらを整理することによって、栄西が南宋社会でなした具体的な活動の一端を窺い知ることができよう。『興禅護国論』巻下「第九大国説話門」には、

謂語西天・中華見行之法式、而欲令信行人入弘法大海之中矣。西天事伝言有<sub>レ</sub>四。

一、昔鎮西筑前州博多津、兩朝通事李德昭、八十歳之時語曰、余昔二十有餘歳、於東京見梵僧、下著单裙、上披袈裟、冬苦寒而不著餘衣、明春帰西土曰、若在此犯<sub>レ</sub>仏制矣。（宋乾道四年、日本仁安三年戊子）。

二、成都府僧語曰、淳熙元年（甲午）、黎州有梵僧来、意气神通、誦神呪、口放光、聞者差<sub>レ</sub>病。下著单裙、上披单衣、冬月極寒、諸僧与<sub>レ</sub>綿衣、遮<sub>レ</sub>手不<sub>レ</sub>著、謂<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>聖開。恐<sub>レ</sub>犯、明春帰西天、云云。（于<sub>レ</sub>時宋紹熙元年、日本建久元年庚戌）。

三、広府僧語曰、崑崙五十餘洲、商舶逐年往来。時僧来穿<sub>レ</sub>耳繫<sub>レ</sub>環、下著单裙、上披单衣、与<sub>レ</sub>西天大同。冬月不<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>綿衣、見<sub>レ</sub>唐僧



威儀、不讚嘆、云云。

四、天台山修禪寺（今大慈寺）和尚祖詠語曰、聞西土毘耶里国、維摩居士方丈、于今見在。南海僧常到菩提樹下禮觀音。大那蘭陀寺有五千僧、多誦三藏典。又仏鉢和修衣皆見在。八塔所在、諸人往返巡礼。是皆今時之事也。

又宋朝奇特、有二十箇。一、淮南僧語曰、清凉山文殊乘師子現、云云。二、天台山時生身羅漢現、足跡亦光明。三、石橋青龍現、現則雨下。四、国清寺等聖跡、一一儼然。五、育王山舍利放光。六、育王山鱷變現、現則雨下。七、僧威儀不乱。八、寺中寂靜。九、多有灰身人。也。淳熙十六年（己酉）春、象田寺僧灰身（今当十年）。十、僧多知死期。十一、俗人持菩薩戒。十二、童子持五戒。十三、道俗無我。十四、東掖山普賢放光。十五、仏殿如生身仏住。十六、経蔵僧堂莊嚴如浄土。十七、帝王必受菩薩戒。十八、無僧營田業者。十九、畜生多有入情。二十、官法不邪枉人民矣。

という記載が存しており、おそらくこれらの内容は榮西の『在唐記』に筆録されていたものであろう。そこで以下、これらの項目の一つについて検討してみることにしたい。はじめに「謂く、西天・中華にて見に行なわるるの法式を語りて、信行の人をして仏法大海の中に入らしめんと欲す。西天の事、伝えて言うに四つ有り」とあるが、これは榮西が西天（インド）と中華（中国）という二大國で現に行なわれている法式のことを語りて、仏法を信じ行なおうとする日本の人々を仏法の大海に導き入れんとするものであり、まず西天の僧のことについて四つの記事を挙げてゐる。

最初に取り挙げられているのは、第一次の入宋に際して筑前（福岡県）博多津において両國通事の李徳昭から直に伝え聞いた逸話であり、

一つに、昔、鎮西筑前州博多津、兩朝通事の李徳昭、八十歳の時に語りて曰く、「余、昔、二十有餘歳にして、東京に於いて梵僧を見る。下に単裙を著け、上に袈裟を披し、冬に苦寒にして餘衣を著けず。明春、西土に帰るに曰く、『若し此に在らば、仏制を犯さん』と。」（宋の乾道四年、日本の仁安三年戊子なり）。

という内容である。この点については第一次の入宋に至る過程としてすでに詳しく触れたところであるから、ここで改めて論じることはいらない。

つぎに示されているのも、同じく西天の梵僧が蜀地（四川省）にやつて来たことに関する記事であつて、

二つに、成都府の僧、語りて曰く、「淳熙元年（甲午）、黎州に梵僧の来たれる有り、意気神通、神呪を誦すれば口より光を放ち、聞く者

は病いを差す。下に単裙を著け、上に単衣を披す。冬月極寒に、諸僧、綿衣を与うるに、手を遮りて著けず、『聖開に非ず』と謂う。犯すを恐れて明春に西天に帰る」と云々。（時に宋の紹熙元年、日本の建久元年庚戌なり）。

と記されている。この逸話は在宋中の栄西が紹熙元年（日本の建久元年、一一九〇）に成都府（四川省）の出身であった僧から聞いたところのものであり、栄西が天童山の懐敵のもとで修行していた時期に相当している。おそらくこの成都出身の僧は天童山の懐敵のもとにあった同参と見られるが、その僧が栄西に語ったところによれば、かつて淳熙元年（一一七四）に黎州（四川省）に梵僧（インド僧）がやって来て意気盛んに神通力を發揮し、神呪（陀羅尼）を唱えるところから光が発せられ、それを聞いた人々は病いも癒えたとされる。ただし、ここでも梵僧は下に単裙を着け、上に単衣を纏うのみであり、真冬の極寒の中で中国の僧侶が綿衣を差し出してもこれを断つて身に着けず、『仏陀が許可したものではない』と言って我慢していたとされる。そして、戒律を犯すことを恐れて明年すなわち淳熙二年（一一七五）の春には西天へと帰って行ったというのである。おそらくこの蜀僧は実際に蜀地においてこの梵僧を目の当たりにしたか、少なくとも見聞いた人から伝え聞いたものであろう。

第三番目に示されているのは、広府（広東省）の出身であった僧が栄西に語ったものであり、

三つに、広府の僧、語りて曰く、「崑崙五十餘洲<sup>四</sup>、商船、年を逐うて往来す。時に僧來たるに、耳を穿ちて環を繫け、下に単裙を著け、上に単衣を披し、西天と大いに同じ。冬月にも綿衣を著けず、唐僧の威儀を見て、讚嘆せず」と云々。

という内容になっている。広府とは広州（広東省）のことであり、時期は記されていないが、二番目の逸話と同じく紹熙元年の前後の頃に広東僧から聞いた話と見られる。ここでいう崑崙五十餘州とは南海の諸州のことであり、広州に南海經由で商船が年を追って頻繁に往来するようになったことが知られ、僧侶の来訪も存したことを伝えている。ただ、南海から来た僧は耳に環（イヤリング）を付け、西天の僧と同じように単裙と単衣のみで冬にも綿衣を着けなかったとし、その南海僧は中国僧（唐僧）の服装など威儀を見て、仏制に反するものとして讚嘆しなかったと述べている。

最後に第四番目として挙げられているのは、台州天台県の天台山修禪寺すなわち当時の大慈寺の住持であった祖詠が栄西に語ったものであり、

四つに、天台山修禪寺（今の天慈寺）の和尚祖詠、語りて曰く、「聞くに、西土の毘耶里国に、維摩居士の方丈、今に見在せりと。南海の僧は常に菩提樹下に到りて観音を礼す。大那蘭陀寺に五千僧有り、多く三藏の典を誦す。又た仏鉢と和修の衣も皆な見在す。八塔の在

る所、諸人は往返巡礼す」と。是れ皆な今時の事なり。

と記されている。この記事もおそらく第二次入宋の際のことと見られ、栄西が天台山万年寺に在った頃に、近隣の大慈寺を訪れて住持の祖詠から直に伝え聞いた内容と推測される。大慈寺の祖詠については具体的に如何なる系統の禪者であるのか、詳しいことは何ら知られていないが、栄西と関わった僧として祖詠という法諱が記されている点で注目される。栄西が第二次入宋を決行する直前に、『大慧普覚禪師年譜』を撰した禪者として祖詠の名が知られており、楊岐派（大慧派祖）の大慧宗杲（妙喜、仏日禪師、大慧普覚禪師、一〇八九—一一六三）の年譜は淳熙一〇年（一一八三）四月に張掄が序を付して刊行されている。また『続伝燈録』巻三二「目錄」の「径山大慧杲禪師法嗣」には「已上六十人無録」の一人として「石泉詠禪師」の名が存している。もし栄西が直に相見した大慈寺の祖詠が大慧宗杲の門人石泉祖詠であれば、きわめて興味深いものがある。祖詠は栄西に対して、中インドの毘耶離城（バイシャーリー）の維摩居士の方丈のこと、仏陀伽耶（ブダガヤ）の菩提樹下に存する観音菩薩像を礼すること、王舎城（ラージャグリハ）の大那爛陀寺（ナーランダ寺）の五〇〇〇僧による三藏經典の誦誦のこと、仏陀の鉢盂や尊者商那和修（シャーナバサ）の袈裟が現存していること、さらに仏陀の靈骨を収めた八大靈塔には多くの人々が巡礼に訪れていることなどを告げている。それらは祖詠が伝え聞いたところとして述べられているが、栄西はそれらのことをいずれも当時のインドの現状であると註している。

このように栄西は在宋中も積極的に西天（インド）のことや西天の僧の事跡について情報を得ることに努めていたことが知られ、実際に赴くことのできなかつたインドへの憧れをこうしたかたちで『興禪護国論』に書き残していたわけである。また栄西が在宋中に天台山大慈寺の祖詠をはじめ、成都や広州の出身僧など多くの中国僧と関わって道交をなし、諸情報を入手していたことが窺われ、きわめて興味深いものがある。

つぎに栄西は「又た宋朝の奇特に二十箇有り」として、宋朝における不思議なできごととして二〇箇に及ぶ事跡を列記している。第一に挙げられているのは、

一つに、淮南の僧、語りて曰く、「清涼山の文殊、師子に乗りて現ず」と、云云。

というものであり、これは淮南すなわち淮水の南の地方すなわち現今の安徽省辺りの出身僧が栄西に語った内容である。清涼山とは代州（山西省）の五臺山のことであり、文殊菩薩の靈場として知られるが、栄西が入宋した当時は金国の治下であって、

江南の人々や日本僧も赴くことができない憧れの霊場であった。五臺山では文殊菩薩が獅子に乗って現ずるということを聞いて、栄西が五臺山に拝登したい衝動に駆られていたことが偲ばれる。

第二と第三に挙げられているのは天台山の石橋の羅漢と青龍のことであり、これは栄西自身が訪れた地であつて、

二つに、天台山には時に生身の羅漢現ず、足跡も亦た光明あり。三つに、石橋には青龍現じ、現ずれば則ち雨下る。

と記している。栄西は第一次の入宋の際にも天台山を訪れているが、第二次の入宋では久しく万年寺にあつて坐禅辦道に努めている。その間に阿羅漢の応現する天台石橋（石梁瀑布）で茶を献じて羅漢の応現に出会したことが伝えられており、石橋には青龍が現ずると信ぜられ、青龍が現われると雨が降ると言い伝えられている。

第四に示されているのは天台山の中心寺院である国清寺などに関わる記載であり、

四つに、国清寺等の聖跡は、一一に儼然たり。

と記されている。栄西も第一次と第二次の在宋中に天台山を訪れているが、天台宗発祥の地である国清寺を訪れていることがこの記事によって判明し、国清寺のほかにも天台智顛（智者大師）ゆかりの史蹟を巡礼してその儼然たる伽藍などを仰ぎ見たことであろう。ただ、栄西が到つた当時、国清寺は天台宗の教寺ではなく、すでに禅宗寺院として機能しており、禅僧が住持を勤めていたことから、栄西としては禅宗の隆盛を否応なしに実感したはずである。

第五と第六はいずれも明州鄞県の阿育王山広利寺に関する記載であつて、実際に栄西は第一次の在宋中に二度も阿育王山を訪れている。第五には「五つに、育王山にて舍利、光を放つ」とあり、阿育王山で仏舍利が光明を放つたことを記したものであるが、阿育王山の仏舍利宝塔のことはすでに触れたことから、ここで再説することはしない。第六には「六つに、育王山にて鱷鰻現じ、現ずれば則ち雨下る」とあり、阿育王山の東一里に存した聖井のことであり、そこに鱷鰻がやって来て仏舍利を守っているという伝説である。『仏祖統紀』巻五四「鄞山舍利」には、阿育王山の仏舍利が夜に光を放つた記事と「鱷鰻伝」が載せられている。

第七と第八は南宋の僧たちが威儀整然としていたことに対する記述である。第七には「七つに、僧の威儀乱れず」とあるが、これは栄西が実際に在宋中に坐禅辦道などの修行生活の中で感じたものである。栄西が修行した天台山万年寺や天童山景德寺、あるいは第一次で訪れた阿育王山広利寺などの禅刹において、修行僧たちの威儀作法が乱れておらず、厳粛な行持が営ま

れたことを伝えたものである。第八には「八つに、寺中寂靜なり」とあり、これも在宋中に訪れた寺々が常に靜寂を保つていたことを述べたものであり、榮西にとって南宋禪林が寂黙さの中で整然と運営されていたことに感慨深いものが存したことを伝えていよう。

第九と第一〇は南宋の僧たちが示寂するときの様子に感歎した内容である。第九には「九つに、多く灰身の人有るなり。淳熙十六年〔己酉〕の春、象田寺の僧、灰身す〔今、十年に当たる〕」とあり、これは南宋で禪定に入つたまま焼身する僧がいたことを述べたものである。とくに榮西は淳熙一六年（一一八九）の春に象田寺の僧が灰身となった記事を明記している。象田寺は越州（浙江省）紹興府上虞県西南に存し、象田山興教禪院と称せられており、象田寺の僧が灰身となったことを実際に榮西は在宋中に風聞したものであろう。第一〇には「十に、僧多く死期を知る」というものであり、南宋の禪僧・教僧・律僧などが多く自らの死期を予知していることを述べている。おそらく榮西は在宋中に多くの禪僧などが自ら死期を察して遺偈を残し、結跏趺坐して示寂する風習を伝え聞いたものと見られ、あるいは実際に万年寺や天童山などで古老の僧が正身端坐して示寂するのにも出会っていたのかも知れない。

第一一と第一二と第一三は俗人や童子がよく戒律を守っていることに注目したものである。第一一には「十一に、俗人は菩薩戒を持す」というものであり、南宋では俗人が菩薩戒を受持っていることに注目している。当時、南宋禪林では禪僧のもとで「仏祖正伝菩薩戒」を受け、これを堅く守って居士として在俗の生活を送る官僚士大夫なども存していたことから、榮西はその存在に刺激を受けたものと見られる。第一二には「十二に、童子は五戒を持す」というものであり、南宋禪林などでは出家前の童子も不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒の五戒を守って生活していると述べている。第一三には「十三に、道俗は無我なり」というものであり、これは南宋では出家者も在家者も仏教の教えを踏まえ、無我をよく体現していると評したものである。

第一四には「十四に、東掖山の普賢、光を放つ」というものであり、『嘉定赤城志』卷一九「山水門」の「山〔臨海〕」に「東掖山、在〔県東北四十五里〕。以其処天台左掖、故名、上有『隔塵亭』」とあり、『嘉定赤城志』卷二七「寺觀門」の「臨海〔教院〕」によれば、東掖山には能仁寺と白蓮寺という教院が存したことが知られる。このいずれかの教寺に普賢菩薩が祀られており、光明を放つて人々の注目するところとなったものであろうか。

第二五には「十五に、仏殿には生身仏の住するが如し」というものであり、南宋の寺院では仏殿に安置されている仏像があたかも生身の仏のごとくであったことを伝えている。これは京都泉涌寺の楊貴妃観音菩薩像のごとく、生きている人のように美しい仏像であったことを述べており、おそらく栄西が赴いた天台山の国清寺や万年寺、明州の阿育王山や天童山の仏殿に祀られていた仏像も生身仏のようであったものと見られる。

第一六には「十六に、経蔵・僧堂は莊嚴なること浄土の如し」というものであり、これは南宋の寺院内の伽藍の莊嚴さを述べており、大蔵経を納めた経蔵や修行僧の生活の場である僧堂がきれいに飾られており、あたかも浄土のごときであったと伝えていいる。おそらく栄西が訪れた天台山の国清寺や万年寺、明州の阿育王山や天童山などの大刹が実際にそのように莊嚴であったものと見られ、栄西も経蔵で宋版大蔵経などを実際に閲覽し、また僧堂内では日々坐禅を行じたわけである。

第一七には「十七に、帝王は必ず菩薩戒を受く」というものであり、南宋では皇帝は必ず菩薩戒を受けていると述べている。これは必ずしもすべての皇帝に該当するものではないが、栄西が入宋した当時の皇帝である南宋の孝宗(趙育、字は元永、一二七—一九四、在位は一二六—一八九)は多くの禅僧や教僧と関わり、彼らから菩薩戒を受けていることから、栄西も仏教に寄せる孝宗の姿などを踏まえて書き残しているものと見られる。

第一八には「十八に、僧の田業を営む者無し」というものであり、南宋では寺院の修行僧で田園(莊園)を所有する者などいないと述べている。これは当時の日本国内の僧が多く、多くの莊園を所有していたのを踏まえて記したものであり、実際には南宋の寺院でも化主や莊主などがいたわけであるから、必ずしも正しくはないが、栄西にとって禅寺などの修行僧が一心不乱に参禅している姿が如何に印象的であったかが偲ばれよう。

第一九には「十九に、畜生は多く人情有り」というものであり、これはおそらく牛や馬・驢馬・犬・猫などが人々と共存している様子を述べたものである。とりわけ水牯牛や狗子(犬)など禅宗では多くの家畜が禅問答にも登場しており、「瀉山水牯牛」「南泉斬猫」「趙州狗子」などの公案も広く行なわれていたわけである。在宋中の栄西にとって南宋では畜生にも人情があり、仏性があるかのごとく思われたものであろう。

第二〇には「二十に、官法は人民を邪枉せず」というものであり、これは南宋の朝廷が発する法律が人民を不当に抑圧していない点を強調している。これも栄西にとって南宋社会が仏法を厚く敬つてゐるためであると映つたものであろう。ちなみに

この二〇箇の奇特を挙げた後、栄西は「然日本国人常諺云、天竺・唐土、仏法已滅、我国独盛也、云云」と述べており、当時の日本国の人々が「天竺・唐土、仏法は已に滅し、我が国のみ独り盛んなり」と豪語していることに対し、如何にそうした考えが独断に満ちたものであり、正統な評価でないかを指摘している。栄西が書き残していることがすべて妥当なものか否かは問題もあるが、少なくとも栄西にとって南宋の寺院とくに禅宗叢林などで見聞してきたことが如何に斬新なものであり、これを通して日本仏教のあり方を再検討したかったかが窺われよう。

このほか、栄西のことばではないが、聖一派の無住道暁（二円房、大円国師、一二二六—一二三二）が著した『雑談集』第八卷「持律坐禅ノ事」に、

中比、建仁寺ノ本願、入唐シテ、禅門戒律ノ儀伝ラレシモ、只校床ニテ事々シキ坐禅ノ儀無リケリ。国ノ風儀ニマカセテ、天台・真言ナドアヒナラベテ、一向ノ禅院ノ儀式、（脱カ）時至テ、仏法房ノ上人、深草ニテ如<sub>レ</sub>大唐、広牀ノ坐禅始テ行ズ。其ノ時ハ、坐禅メツラシキ事ニテ、有信俗等拜シ貴ガリケリ。其ノ時ノ僧ノカタリ侍シ。

其ノ後、東福寺ノ開山、度宋シ、径山ノ下ニ久住シ、坐禅等ノ作法、被<sub>レ</sub>行ケリ。コトニ隆老、唐僧ニテ、建長寺、如宋朝ノ作法、行ハレシヨリ後、天下ニ禅院ノ作法流布セリ。時ノ至ルナルベシ。

という記事が伝えられている。これによれば、栄西は南宋から禅宗の菩薩戒を伝えたが、僧堂を建てて修行僧と正式な坐禅の実践を行なうことはなかったとされる。栄西は日本の風儀に背かず天台や密教などを併修する兼修禅の立場に立ち、一途に禅宗独自の作法のみを行なうことはなかったと伝えている。正式な僧堂の長連床で宋朝のごとく坐禅の儀式が行なわれたのは、山城（京都府）深草に興聖玉林寺を開いた曹洞宗の道元（仏法房）に至つてのことであり、道暁は実際に興聖寺の僧侶で修行した僧から伝え聞いている。その後、破庵派（聖一派祖）の円爾（辨円、聖一國師、一二〇二—一二八〇）が京都の慧日山東福寺で、松源派（大覚派祖）の蘭溪道隆（大覚禅師、一二三三—一二七八）が鎌倉の巨福山建長寺で、それぞれ坐禅の作法を広めたと伝えている。

同じく『雑談集』巻九「仏法ノ盛衰事」には、

故建仁寺本願、度唐シテ如法ノ大袈裟・大衣・持斎ノ行儀、我国ニ始行テ、中興ノ師也。

という記事も伝えられており、栄西が南宋禅林から将来した品々が挙げられている。栄西は如法の大袈裟や大衣あるいは持斎

の行儀などを日本に初めて伝えた点が特筆されている。大袈裟や大衣といった品や持斎の行儀もおそらく栄西が天童山の懐敵から直接に授けられたものであろう。

### 天童山千仏閣記について

いま一つ注目すべき事跡は、天童山の千仏閣の修復に対して栄西がなした輝かしい功績であろう。すでに触れたごとく千仏閣は第一六世中興であった曹洞宗の宏智正覚によって紹興四年（一一三四）に創建されていたが、その後、六〇年の歳月を経て老朽化が進んでいたものらしい。そのため天童山に入寺した懐敵は千仏閣を修復したい意図を在宋中の栄西に語っていたのである。『元亨釈書』の栄西章には「又修（観音院・大慈寺・智者塔院）及天童山千仏宝閣」とあり、『明菴西公禪師塔銘』にも「又脩天童山千仏宝閣」と記されている。

楼鑰（字は大防、攻瑰主人、一一三七―一二二三）の『攻瑰集』巻五七「記」に「天童山千仏閣記」が収められており、また『鄰交徵書初篇』巻一「宋」にも楼鑰撰「太白名山千仏閣記」の拓本の写し<sup>(20)</sup>が載せられている。『鄰交徵書初篇』に収められた拓本は、もともと破庵派の円爾が天童山から将来したものであり、かつて京都の慧日山東福寺に所蔵されていたとされる。天明元年（一七八一）七月に東福寺住持の舜峯師孝（一七一三―一七九三）が建仁寺住持の高峰東峻（魯峰、一七三六―一八〇二）の請で、この「太白名山千仏閣記」を建仁寺に贈ったものであったが、天保八年（一八三七）九月二十七日に建仁寺の宝蔵が火災に遭遇した際、その拓本も焼失したと伝えられている。幸いに焼失する以前に新碑の榻本を写した内容が『鄰交徵書初篇』に収められていたため、辛うじてその文面が現今に知られるわけである。拓本の写しによれば、楼鑰は慶元四年（一一九八）三月清明の日に「太白名山千仏閣記」を撰しており、陳希と李顛という二人の工匠が模刻し、天童山の知事であった道珂が立石したことが記されている。

この「天童山千仏閣記」ないし「太白名山千仏閣記」には、宏智正覚・慈航了朴・虚庵懐敵という天童山の三禪者の活動のさまが記されているが、日本僧栄西の記事が大きく取り上げられている。「千仏閣記」には栄西が願心を起こして西域に赴こうとして入宋し、これを断念して万年寺の懐敵のもとに投じたこと、懐敵とともに天童山に随侍したことが記されている。さらに懐敵に千仏閣改作の意があることを聞いた栄西は、日本に帰ったら自分が国王すなわち後白河上皇の近属として日本の良



材を送ることを告げている。帰国した榮西は二年後に百圍の材木を大船に挟んで天童山に送り届けたとされ、工事は紹熙四年（一一九三）季秋九月から三年間で完成したと伝えているから、慶元元年（一一九五）か同二年には竣工したものである。榮西が天童山の千仏閣造営に対して日本から百圍の木々を送ったことは、簡略ながら『宝慶四明志』卷一三『鄞県志第二』の「寺院（禪院）」や『延祐四明志』卷一七「釈道攷中」の「鄞県寺院（禪院）」の「天童山景德寺」の項に載せられている。

楼鑰の『攻媿集』卷五七「記」の「天童山千仏閣記」には懷敏と榮西に関わる記事が収められている。

天童山千仏閣記。  
淳熙五年、孝宗皇帝、親灑宸翰、大書太白名山、以賜天童山景德禪寺。寺之門甚雄、敬刻雲章、尊閣其上。又于方丈、專建一閣、以藏真跡、実為禪林盛事、前所未有也。初西晋永康中、沙門義興、卓庵此山。有童子來給薪水、後既有衆、遂辞去曰、吾太白一辰、上帝以師篤于道行、遣侍左右。因忽不見。自是始有太白天童之名。山在郡東南六十里所、太白一峯、高庄千嶺、雄尊深秀、為一郡之望。紹興初、宏智禪師正覺、欲撤其寺而新之、謀于衆。有蜀僧、以陰陽家言、自獻曰、此寺所以未大顯者、山川宏大、而棟宇未稱。師能為層樓傑閣、以發越淑靈之氣、則此山之名、且將振耀于時矣。覺深然之。乃拓旧址、謀興作、内外鼎新、以次就成。智匠高妙、務極崇侈、門為高閣、延袤兩廡、鑄千仏列其上。前為二大池、中立七塔、交映澄澈。游是山者、初入万松関、則青松夾道凡三十里、雲棟雪脊、層見林表、而倒影池中。未入窺樓閣、已非人間世矣。中建盧舍那閣、尤為壯麗。住山三十年、其為久遠之計、皆絶人遠甚。後有慈航了朴一坐亦二十年、起超諸有閣于盧舍那閣之前、複道聯屬、至今巋然相望。又大築海塗、增益歲入。由是、天童不特為四明甲刹、東南數千里、亦皆推為第一。游宦者必至、至則忘歸、歸而詫于人、声聞四方。江湖衲子、以不至為歎。皇子魏惠憲王、出鎮一見慈航、歎若平生。暇日來游、顧瞻山林、登玲瓏坐宿鸞。或累日不忍去、因囑以進于上。會稽郡王太師史文惠公、又從容奏請、遂有四大字之賜。瑰奇絶特之觀、無以加矣。十六年、虛庵懷敏、自天台万年來、主是刹、百廢具舉、追跡二老。而千仏之閣、歲久浸圯、且將弗支。猶以前人規模、為未足以稱上賜、欲從而振起更出旧閣及前二閣之上、僉以為難。師之志不回也。先是、日本國僧千光法師榮西者、憤發願心、欲往西域、求教外別伝之宗。若有告以天台万年為可依者、航海而來、以師為歸。及遷天童、西亦隨至。居歲餘、聞師有改作之意、請曰、思報撰受之恩、糜軀所不憚、況下此者乎。吾忝國主近属、它日歸國、当致良材以為助。師曰、唯。未幾遂歸。越二年、果致百圍之木。凡若干、挟大船泛鯨波而至焉。千夫咸集、浮江蔽河、輦致山中。師笑曰、吾事濟矣。于是、鳩工度材、雲委山積、列楹四十、多日本所致、餘則

取<sub>二</sub>于境内之山。始建<sub>二</sub>于紹熙四年季秋之甲申、才三載告<sub>一</sub>畢。費<sub>二</sub>緡錢二万<sub>一</sub>有奇。是歲、海莊倍稔、贏穀三千斛、如有相<sub>レ</sub>之者、不求<sub>二</sub>于人、見者樂<sub>レ</sub>施、以迄<sub>二</sub>于成。凡為<sub>二</sub>閣七間、高為<sub>二</sub>三層、橫十有四丈、其高十有二丈、深八十四尺、衆楹俱三十有五尺。外開<sub>二</sub>三門、上為<sub>二</sub>藻井、井而上十有四尺為<sub>二</sub>虎座。大木交貫、堅緻壯密、牢不可<sub>レ</sub>拔、上層又高七丈、拳<sub>二</sub>千仞<sub>一</sub>居<sub>レ</sub>之。位置面勢、無不<sub>レ</sub>曲當、外檐三、內檐四、檐牙高啄、直如<sub>レ</sub>引繩。旅楹有<sub>二</sub>閑、鞏飛鼓翼、周延<sub>二</sub>四阿、繚以<sub>二</sub>欄楯。內為<sub>二</sub>綺疏、表裏明豁、自<sub>レ</sub>下仰望、如<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>崑閩。梵唄磬鐘、半空振響。徜徉登覽、四山下瞰、河漢星斗、如在<sub>二</sub>欄檻。御書金榜、巍乎中峙、翊以<sub>二</sub>翔龍、護以<sub>二</sub>絳綃。高出<sub>二</sub>雲霄之上、真足以彈<sub>二</sub>庄山川、伝<sub>二</sub>示千古。善財童子、大裝嚴藏、入見<sub>二</sub>樓閣、広博無量、則不可<sub>レ</sub>知。若<sub>レ</sub>經<sub>二</sub>行四方室屋、巨麗殆未<sub>レ</sub>見<sub>二</sub>其比<sub>一</sub>也。鑰奉<sub>二</sub>祠東婦、嘗往遊<sub>レ</sub>焉、驚<sub>二</sub>歎傑特、目眩神駭、過于百聞。敞請<sub>レ</sub>記<sub>二</sub>其事。老矣學落、不能<sub>レ</sub>形容、姑記<sub>二</sub>大概、以表<sub>二</sub>吾鄉之勝。海內好奇之士、欲<sub>レ</sub>游而未<sub>レ</sub>遂者覽<sub>レ</sub>此、則太白之景、思過<sub>二</sub>半矣。虛菴道儒素高、禪子向<sub>レ</sub>方、島夷亦聞<sub>二</sub>其名而歸<sub>レ</sub>之。加以<sub>二</sub>願力深重、才刃恢恢、巧匠瑰材、成<sub>二</sub>此勝事。觀者無<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>羨歎、或請<sub>レ</sub>飾<sub>レ</sub>之。敞曰、殫<sub>レ</sub>力竭<sub>レ</sub>財、幸躋<sub>二</sub>登、茲行且謝去、若<sub>レ</sub>丹牒華飾、尚有<sub>レ</sub>頼<sub>二</sub>于後之人<sub>一</sub>云。

この史料は『鄰交徵書初篇』にも「大白名山千仞閣記。樓鑰（大防）」として載せられており、字句に若干の異同や追補が存していることから、その全文も載せておくことにしたい。

太白名山千仞閣記。

樓鑰（大防）。

淳熙五年、孝宗皇帝、親灑<sub>二</sub>宸翰、大書<sub>二</sub>太白名山、以賜<sub>二</sub>天童山景德禪寺。寺之門甚雄、敬刻<sub>二</sub>雲章、尊閣<sub>二</sub>其上。又於<sub>二</sub>方丈、專建<sub>二</sub>一閣、以藏<sub>二</sub>真蹟、實為<sub>二</sub>禪林盛事、前所<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>有也。初西晋永康中、沙門義興、卓菴<sub>二</sub>此山。有<sub>二</sub>童子<sub>一</sub>手給<sub>二</sub>薪水、後既有<sub>二</sub>衆、遂辭去曰、吾太白一辰、上帝以<sub>二</sub>師篤<sub>二</sub>於道行、遣侍<sub>二</sub>左右。因忽<sub>レ</sub>不見。自是始有<sub>二</sub>太白天童之名。山在<sub>二</sub>郡東南六十里許、太白一峯、高<sub>二</sub>庄千嶺、雄尊深秀、為<sub>二</sub>一郡之望。紹興初、宏智禪師正覺、欲<sub>レ</sub>撤<sub>二</sub>其寺<sub>一</sub>而新<sub>レ</sub>之、謀<sub>二</sub>於衆。有<sub>二</sub>蜀僧、以<sub>二</sub>陰陽家言、自獻曰、此寺所以<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>大顯者、山川宏大、而棟宇未<sub>レ</sub>稱。師能極<sub>二</sub>土木之工、為<sub>二</sub>層樓傑閣、以倍<sub>二</sub>蓰於今、則淑靈之氣、始得<sub>二</sub>發越、而此山之名、且將<sub>二</sub>震<sub>二</sub>耀於時<sub>一</sub>矣。覺深然<sub>レ</sub>之。乃拓<sub>二</sub>旧址<sub>一</sub>謀<sub>二</sub>興作、內外鼎新、以<sub>レ</sub>次就成。智匠高妙、務極<sub>二</sub>崇侈、門為<sub>二</sub>高閣、延<sub>二</sub>袤兩廡、鑄<sub>二</sub>千仞<sub>一</sub>列<sub>二</sub>其上。前為<sub>二</sub>二大池、中立<sub>二</sub>七塔、交映澄澈。遊<sub>二</sub>是山者、初入<sub>二</sub>三万松関、則青松夾<sub>二</sub>道凡二十里、雲棟雪脊、層<sub>二</sub>見林表、而倒<sub>二</sub>影池中。未<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>宝樓閣、已非<sub>二</sub>人間世<sub>一</sub>矣。中建<sub>二</sub>盧舍那閣、尤為<sub>二</sub>壯麗。住山三十年、其為<sub>二</sub>久遠之計、皆絶<sub>二</sub>人遠甚。後有<sub>二</sub>慈航了樸、一坐亦二十年、起<sub>二</sub>超諸有閣於盧舍那閣之前、複道聯屬。至<sub>レ</sub>今歸然相望。又大築<sub>二</sub>海塗、增<sub>二</sub>益歲入。由是、天童不<sub>レ</sub>特為<sub>二</sub>四明甲刹、東南數千里、亦皆推為<sub>二</sub>第一。遊觀者必至、至則忘<sub>レ</sub>婦、

歸而訖於人、声聞四方。江湖衲子、以不至為歉。皇子魏惠憲王、出鎮一見慈航、權若平生。暇日來游、顧瞻山林、登玲瓏坐宿鸞。或累日不忍去、因因以進於上。會稽郡王太師史文惠公、又從容奏請、遂有四大字之賜。瑰奇絕特之觀、無以加矣。十六年、虛菴懷敏、自天台万年來、主是刹、百廢具舉、追跡二老。而千仏之閣、歲久寢圯、且將弗支。猶以前人規模、為未足以稱上賜、欲從而振起更出旧閣及前二閣之上、僉以為難。師之志不回也。先是、日本國僧千光法師榮西者、憤發願心、欲往西域求教外別伝之宗。若有告以天台万年為可依者、航海而來、以師為歸。及遷天童、西亦隨至。居歲餘、聞師有改作之意、請曰、思報撰受之恩、糜軀所不憚、況下此者乎。吾忝國王近屬、他日歸國、當致良材以為助。師曰、唯。未幾遂歸。越二年、果致百閉之木凡若干、扶大舶泛鯨波而至焉。千夫咸集、浮江蔽河、輦致山中。師笑曰、吾事濟矣。於是、鳩工度材、雲委山積、列楹四十、多日本所致、餘則取於境內之山。始建於紹熙四年季秋之甲申、才三載告畢。費緡錢二万有奇。是歲、海莊倍稔、贏穀三千斛。如有相之者、不求於人、見者樂施、以迄於成。凡為閣七間、高為三層、棟橫十有四丈、其高十有二丈、深八十四尺、衆楹俱三十有五尺。外開三門、上為藻井、井而上十有四尺為虎座。大木交貫、堅緻壯密、牢不可拔、上層又高七尺、拳千仏居之。位置面勢、無不曲當、外檐三、內檐四、檐牙高啄、直如引繩。旅楹有閑、翬飛歧翼、周延四阿、縹以欄楯。內為綺疏、表裏明豁、自下仰望、如見崑閬。梵唄鐘磬、半空振響。徜徉登覽、四山下瞰、河漢星斗、如在欄檻。御書金榜、巍乎中峙、翊以翔龍、護以絳綃。高出雲霄之上、真足以彈压山川、伝示千古。善財童子、大莊嚴藏、入見樓閣、廣博無量、則不可知。若經行四方室屋、巨麗殆未見其比也。鑰奉祠東歸、嘗往游焉、驚歎傑特、目眩神駭、過於百聞。敝請記其事。老矣學落、不能形容、姑記大概、以表吾鄉之勝。海內好奇之士、欲游而未遂者覽此、則太白之景、思過半矣。虛菴道師素高、禪子向方、島夷亦聞其名而歸之。加以願力深重、才刃恢恢、巧匠瑰才、成此勝事。觀者無不欽歎、或請飾之。敏曰、彈力竭材、事濟登、茲行且謝去。若丹腰華飾、尚有賴後之人云。

慶元四年清明日、顯謨閣直學士大中大夫提學江州太平興國宮奉化泉開國男食邑三百戶樓鑰撰并書。

山門知事僧道珂立石。陳希・李顯模刊。

○真碑榻本、聖一賣婦物也。旧藏東福寺。天明中、住持師孝、因建仁住持東峻請贈之。惜乎、去歲失于庫火。天童寺志、載此記頗有誤脫。真碑榻本、存日写之。

この「太白名山千仏閣記」は実際に天童山の千仏閣の一隅に立石された石碑の拓本に基づいて筆記された内容であるだけに、

明庵榮西の在宋中の動静について(下)(佐藤)

楼鑰が最終的に文章を推敲した貴重なものであり、かつ立石の事情なども記されている点で第一等の金石史料の写しであるといつてよい。

## 千仏閣記の内容

『玫瑰集』に載る「天童山千仏閣記」は文章を若干ながら省略した箇所が見られることから、つぎに実際に千仏閣の一角に立石された石碑の拓本である「太白名山千仏閣記」を筆写した『鄰交徵書初編』の記載に基づいて、私なりに書き下し文を載せておくことにしたい。

天童山千仏閣記。

楼鑰（大防）。

淳熙五年、孝宗皇帝、親しく宸翰を灑ぎ、「太白名山」と大書し、以て天童山景德禪寺に賜う。寺の門は甚だ雄んにして、敬んで雲章に刻み、尊びて其の上に閣す。又た方丈に於いて専ら一閣を建て、以て真跡を蔵む、実に禪林の盛事と為し、前に未だ有らざる所なり。初め西晋の永康中、沙門義興、菴を此の山に卓つ。童子有りて手づから薪水を給す。後に既に衆有れば、遂に辞し去りて曰く、「吾れは太白の一辰なり、上帝、師の道行に篤きを以て、遣わして左右に侍せしむ」と。因りて忽ち見えず。是れより始めて太白天童の名有り。山は郡の東南六十里許に在り、太白の一峯、高く千嶺を圧し、雄尊深秀にして、一郡の望と為す。

紹興の初め、宏智禪師正覚、其の寺を撤きて之れを新たにせんと欲して、衆に謀る。蜀僧有り、陰陽家の言を以て自ら獻じて曰く、「此の寺の未だ大いに顕われざる所以とは、山川は宏大なるも、棟宇未だ称わざればなり。師、能く土木の工を極め、層樓・傑閣を為し、以て今に倍蓰せば、則ち淑霊の氣、始めて発越するを得て、此の山の名は且つ將に時に震耀せん」と。覚深く之れを然りとす。乃ち旧址を拓き興作を謀り、内外鼎新し、次を以て就成す。智匠高妙にして、務めて崇修を極め、門は高閣と為り、両廡を延袤し、千仏を鑄して其の上に列す。前には二大池を為し、中に七塔を立て、交映澄澈す。是の山に遊ぶ者、初め万松関に入りて、則ち青松の道を夾むこと凡そ二十里、雲棟と雪脊、林表に層見して、池中に倒影す。未だ宝楼閣に入らざるに、已に人間世に非ざるなり。中に盧舍那閣を建て、尤も壯麗と為す。住山すること三十年、其の久遠の計を為して、皆な人を絶すること遠く甚だし。

後に慈航了機有り、一たび坐すること亦た二十年、諸有閣を盧舍那閣の前に起超し、複道聯属す。今に至るまで巋然として相い望む。又大いに海塗を築き、歳人を増益す。是れに由りて、天童は特だ四明の甲刹と為すのみならず、東南数千里にて、亦た皆な推して第一と

為す。遊観する者は必ず至り、至れば則ち帰るを忘れ、帰りては人に詫げ、声は四方に聞こゆ。江湖の衲子、至らざるを以て歎と為す。皇子魏惠憲王、鎮を出でて慈航を一见し、懽ぶこと平生の若し。暇日には来游し、山林を顧瞻し、玲瓏に登り宿鶯に坐す。或いは累日、去るに忍びず、因りて図して以て上に進す。会稽郡王太師史文惠公、又た従容として奏請し、遂に四大字の賜有り。瑰奇絶特の観、以て加うる無し。

十六年、虚菴懷敏、天台の万年より来たりて、是の刹を主り、百廢具に挙げ、二老を追跡す。而して千仏の閣、歳久しくして浸や圯れ、且つ將に支えざらんとす。猶お前人の規模を以て、未だ以て上賜に称うに足らずと為し、従りて振い起こして更に旧閣及び前二閣の上に出ださんと欲し、僉な以て難と為す。師の志しは回らざるなり。是れより先、日本国僧の千光法師榮西という者、願心を憤発し、西域に往きて教外別伝の宗を求めんと欲す。告ぐるに天台の万年を以て依るべきと為す者有るが若く、海を航して来たり、師を以て帰と為す。天童に遷るに及んで、西亦た随いて至る。居ること歳餘、師に改作の意有るを聞き、請うて曰く、「撰受の恩に報いんと思ひ、軀を糜やして憚からざる所、況んや此れに下れん者か。吾れ国主の近属を忝くす、他日、国に帰らば、当に良材を致して以て助を為すべし」と。師曰く、「唯」と。未だ幾ならずして遂に帰る。二年を越えて、果して百開の木を致すこと凡そ若干、大船に挟み鯨波に泛べて至る。千夫咸な集まり、江に浮べ河を蔽い、輦きて山中に致す。師、笑いて曰く、「吾が事済れり」と。是に於いて、工を鳩めて材を度し、雲のごとく委み山のごとく積み、楹を列ぬること四十、多くは日本の致す所にして、餘は則ち境内の山より取る。始め紹熙四年季秋の甲申より建て、才かに三載にして畢るを告ぐ。緡銭を費やすこと二方に奇り有り。是の歳、海莊は稔りを倍し、穀を贏すこと三千斛なり。之れを相る者有るが如きは、人に求めず、見る者は施すを樂しみ、以て成すに迄る。凡そ閣七間と為り、高く三層と為り、棟の横は十有四丈、其の高さは十有二丈、深さは八十四尺、衆くの楹は俱に三十有五尺なり。外は三門に開き、上は藻井と為り、井は上ること十有四尺にして虎座と為る。大木交ごも貫き、堅緻にして壮密なり、牢くして抜くべからず、上層は又た高さ七尺にして、千仏を挙げて之れに居せしむ。位置面勢は、曲げて当らざる無し。外の檐は三、内の檐は四にして、檐牙は高く啄き、直なること繩を引くが如し。旅楹は閑有り、輦飛は翼を駆け、周らずに四阿を延べ、繚らずに欄楯を以てす。内は綺疏を為し、表裏明豁にして、下より仰望せば、崑閩を見るが如し。梵唄・鐘磬は、半空に振響す。徜徉として登りて覽れば、四山は下に瞰め、河漢星斗は欄檻に在るが如し。御書金榜は、中峙に巍乎とし、翊ぶに翔龍を以てし、護るに絳綃を以てす。高く雲霄の上に出で、真に以て山川を彈圧し、千古に伝示するに足る。善財童子、大莊嚴藏にて、入りて樓閣を見、広博無量にして、則ち知るべからず。若し四方の室屋を経行せば、巨麗にして殆んど未だ其の比を見ざるなり。

鑰、祠を奉じて東帰し、嘗て往いて焉れに遊び、傑特なるに驚歎し、目に眩み神に駭き、百聞より過ぐ。敵、其の事を記さんことを請う。老いて学落ち、形容すること能わず、姑らく大概を記して、以て吾が郷の勝を表す。海内好奇の士、遊ばんと欲して未だ遂げざる者、此れを覽ば、則ち太白の景は思い半ばを過ぎん。虚菴の道価は素より高く、禪子は方しきに向い、鳥夷も亦た其の名を聞きて之れに帰す。加うるに願力は深重にして、才刃は恢恢として、巧匠は瑰才なるを以て、此の勝事を成す。観る者は歎歎せざる無く、或いは之れを飾らんことを請う。敵曰く、「力を殫くし材を竭くし、事は済登し、茲の行は且らく謝し去る。丹雘華飾の若きは、尚お後の人に頼むこと有らんと云う。」

慶元四年清明の日、顕謨閣直学士大中大夫提拏江州太平興国宮奉化泉開国男食邑三百戸、楼鑰撰し并びに書す。

山門知事僧の道珂、立石す。陳希・李顛、模刊す。

○真碑の榻本は、聖一の賣し<sup>もた</sup>帰りし物なり。旧く東福寺に蔵す。天命中、住持の師孝、建仁住持の東暖の請に因りて之れを贈る。惜し  
いかな、去歳、庫火に失う。『天童寺志』に、此の記を載するも、頗る誤脱有り。真碑の榻本、存りし日に之れを写す。

このように「太白名山千仏閣記」はきわめて貴重な内容を伝えていることが知られ、つぎに示すごとくこの拓本が失われたことは誠に惜しまれるのである。ちなみに『扶桑五山記』一「大宋国諸寺位次」の「五山」の「第三、明州慶元府太白山天童景德禪寺」の項に「五鳳楼。楼大参作<sup>レ</sup>記、楼上安置千仏、名曰千仏閣」と記されており、天童山の五鳳楼の上に千仏を安置したことから、千仏閣と名づけられたことが知られ、大参の楼鑰が「天童山千仏閣記」ないし「太白名山千仏閣記」を著したわけであるが、これを一に「天童五鳳楼記」とも称したもののようである。

### 拓本の変遷

すでに紹介したごとく京都東福寺には円爾が将来した「太白名山千仏閣記」の拓本もかつて存在していたわけであるが、その後、焼失して残念ながら現今に伝えられていない。円爾は実際に天童山の千仏閣を拝登し、目の当たりに「太白名山千仏閣記」を仰ぎ見、さらにその拓本を求めて帰国しているのであり、久しく東福寺の山内に大切に保管されていたことが知られる。この拓本が現今に残されていたならば、貴重な史料となり得たはずであり、その焼失は誠に惜しまれてならない。『鄰交徵書初篇』にはそこからの引用として、

慶元四年清明日、顕謨閣直學士大中大夫提學江州太平興國宮奉化縣開國男食邑三百戶樓鑰撰并書。

山門知事僧道珂立石。陳希・李顯模刊。

と記されており、拓本の写しによれば、樓鑰は慶元四年（一一九八）三月の清明の日に「太白名山千仏閣記」を撰していることが知られ、しかも自身で石碑の文字を揮毫している。これを陳希と李顯という二人の工匠が模刻し、寺の知事僧であった道珂が立石したことが判明する。さらに『鄰交徵書初篇』には、この拓本の伝来と焼失に関する経緯を説明して、

真碑榻本、聖一賣婦物也。旧藏東福寺。天明中、住持師孝、因建仁住持東峻請贈之。惜乎、去歲失于庫火。天童寺志、載此記頗有誤脫。真碑榻本、存日写之。

と書き残されている。この「太白名山千仏閣記」の拓本はもともと円爾が南宋の淳祐二年（日本の仁治二年、一二四二）に帰国する際に日本へと持ち帰り、京都の慧日山東福寺に所蔵したものである。したがって、慶元四年に立石されてわずか四〇余年後に写されたことになり、かなり鮮明な拓本であったものと見られる。この拓本はその後五世紀以上にわたって久しく東福寺の山内に収蔵されていたわけであるが、天明元年（一七八一）七月に建仁寺住持の高峰東峻の請を受け、東福寺住持の舜峯師孝がこの「太白名山千仏閣記」の拓本を建仁寺に贈呈している。しかし、それより半世紀を経た天保八年（一八三七）九月二十七日に建仁寺の宝蔵が火災に遭遇した際、残念なことにこの拓本も焼失したとされる。幸いに焼失する以前に伊藤松（字は貞一、号は威山）が新碑の榻本を写した内容が『鄰交徵書初篇』に収められているわけであり、伊藤松の貢献によって文面のみながら後世に伝えられたことは幸運であったといえよう。

樓鑰の「太白名山千仏閣記」ないし「天童山千仏閣記」によれば、榮西が懷敵に随侍して天童山景德寺に移ったのは淳熙一六年（一一八九）のこととされ、また紹熙二年（一一九二）に帰国した榮西が二年を越えて日本から天童山の懷敵のもとに良材を送り、紹熙四年（一一九三）九月から工事が始まり、千仏閣が完成したのは三年後であったと記されている。この点は『宝慶四明志』卷一三「鄞県志第二」の「寺院（禅院）」の「天童山景德寺」の項においても、

紹興初、宏智禪師正覺、撤寺而新之、層樓傑閣、倍蓰于前。淳熙五年、孝宗皇帝、親灑宸翰、書「太白名山、賜僧了朴」。十六年、僧懷敵來主寺、欲建千仏閣、摹画甚広。先是、日本国僧榮西、從敵遊。輒辭帰、致百開之木、泛鯨波、以至。経始于紹熙四年之季秋、歷三載、始就、梵宇宏麗、遂甲東南。

明庵榮西の在宋中の動静について（下）（佐藤）

とあり、千仏閣の修造工事が始まったのを紹熙四年の季秋であったと伝えている。<sup>(24)</sup> 少なくとも紹熙四年の時点で懐敏の示寂について触れていないことから、この時点では懐敏はいまだ天童山の現住として自ら先頭に立って千仏閣修造に邁進していたものと解される。その後、三年を経て完成したとされるから、三年目に当たる慶元元年（一一九五）に完成したのか、丸三年を経た慶元二年（一一九六）に完成を見たものであろう。『鄰交徵書初篇』に載る拓本の写しによれば、慶元四年（一一九八）の清明の日に至って、楼鑰が「太白名山千仏閣記」ないし「天童山千仏閣記」を記して石碑が立石されたことが知られる。<sup>(25)</sup>

### 虚庵懐敏の示寂とその墓塔

虚庵懐敏が示寂した年月日に関しては残念ながら記載が存しておらず、その詳細は定かでない。「太白名山千仏閣記」ないし「天童山千仏閣記」によれば、紹熙四年に栄西が日本から良材を天童山に送り届けた際、懐敏は「吾が事済れり」と喜んだとされ、それから陣頭に立って職人を集めて荘厳な千仏閣の修復に尽力したことが伝えられる。三年を経て千仏閣が完成した時点で、懐敏は楼鑰に対して千仏閣に関する記事を文章に記してほしい旨を告げ、これに応じて楼鑰が著したのが「太白名山千仏閣記」ないし「天童山千仏閣記」なのである。しかも楼鑰は文中で懐敏の示寂について何も伝えていないことから、少なくとも懐敏は慶元四年の清明の日の近くまでは健在ないし存命していたものと推測されよう。ただ、末尾の立石者の名が天童山住持の懐敏ではなく、知事僧の道珂であることから、立石の段階で懐敏はすでに老齢や病気などの理由で住持の座を退いていたか、立石の直前に示寂していたのかも知れない。明確にはし得ないものの、懐敏は慶元年間（一一九五—一二〇〇）の後半には示寂しているのではないかと推測される。あたかも本師の雪庵従瑾が慶元六年（一二〇〇）七月に八四歳で示寂しているから、懐敏は従瑾より年齢は若かったはずであり、従瑾に先んじて示寂したものと見られる。

ところで、『天童寺志』巻七「塔像攷」の「虚庵懐敏師塔」の箇所には、

虚庵懐敏師塔、新菴後、千光西礼<sup>レ</sup>塔偈。海外精藍特特来、青山迎<sup>レ</sup>我笑颜開、三生未<sup>レ</sup>朽梅花骨、石上尋思掃<sup>レ</sup>緑苔。

という記載が存しており、そこには「千光西、塔を礼する偈」が収められている。懐敏が天童山で示寂した後、栄西が三たび入宋したという記事は存しないから、おそらくこの礼祖塔の偈頌は、栄西が懐敏の示寂を知って認めた偈頌を門人が持参して入宋し、天童山に存した懐敏の墓塔を礼した際に献じたものではないかと推測される。少なくとも懐敏が示寂した訃報が商船



を通して天童山から日本の榮西のもとに伝えられ、榮西が亡き師懷敞を偲んで詠じた偈頌が存し、それが再び天童山に齎されて後世に知られた偈頌が榮西の「礼塔偈」であったことになろう。榮西の弟子ないし孫弟子で早くに入宋した人物はいく人か知られているが、それが退耕行勇（莊嚴房、一一六三—一二四一）であったのか、大歇了心（般若房）であったのか、隆禪であったのか、明全・道元らに至つてのことであつたのかは定かでない。榮西が本師懷敞の墓塔に呈した偈頌の内容は、辛うじて天童山において伝承され、何らかのかたちで後世まで伝えられたものであろう。いま、この偈頌を書き下すならば、

海外の精藍、特特として来たるに、青山は我れを迎えて笑顔開く。  
三生しても未だ朽ちず、梅花の骨。石上にて尋思し、緑苔を掃う。

といった具合になろう。海外の精藍とは日本僧榮西から見て天童山の堂塔伽藍を指しており、天童山の青い山並みが日本僧榮西を温かく迎えてくれ、笑顔とあるのは具体的に住持の懷敞が笑顔をもつて接してくれたことを意味しよう。三たび生まれ変わったも墓塔に眠る懷敞の靈骨は朽ちることがないというのも、懷敞から伝え受けた仏法を朽ちさせない決意を述べたものである。墓石の上で苔を払って暫し思いに耽るとあるが、榮西が三度目の入宋を果たすことはなかったわけであるから、これは榮西の思いを語つたものということになろう。もちろん、そこには六祖慧能（盧行者、大鑑禪師、六三八—七二三）の「尋思去」の指示で青原行思（弘濟大師、？—七四〇）に参じ、やがて南嶽峰頂で石上に打坐した石頭希遷（無際大師、七〇〇—七九〇）の故事が詠われている。ただし、いま一つ可能性として考えられるのは、天童山で懷敞が示寂したという訃音が遠く海を隔てて日本の榮西のもとに伝えられた際、いまだ九州の地に在つた榮西が密かに自ら三度目の入宋をなし、実際に天童山の懷敞の墓塔に拝登し、苔を払って墓前にて乳の恩に報いる偈頌を詠じているのかも知れない。

ところで、『天童寺志』巻七「塔像攷」によれば、懷敞の墓塔は「新菴の後」に存したとされるが、果たして天童山内の何れの地に建立されたものであろうか。同じ「塔像攷」の「慈航朴禪師塔」の箇所にも「寺西、新菴上」とあり、同じく「無際派禪師塔」の箇所にも「寺之西、慈航禪師塔右」と記されている。こうした記事からすると、新菴は天童山景德寺の伽藍の西に存したものでらしく、そこには黄龍派の慈航了朴と虚庵懷敞および大慧派の無際了派（一一四九—一二三四）などの墓塔が立ち並んでいたことが知られる。ちなみに了派は大慧派の拙庵徳光の法を嗣いだ高弟の一人であり、後に入宋した道元が最初に参学した臨濟禪者として知られる。<sup>(26)</sup>

一方、同じく『天童寺志』巻七「塔像攷」の「雪菴瑾禪師塔」の箇所には、師嗣「万年貫、晚主「天童」。寿八十四、素「浴更衣、書「偈投」筆而逝。命葬「全身于台州万年心聞貫禪師塔旁」とあり、懷敏の本師で同じく天童山に住持した雪庵從瑾の墓塔が天台山の万年寺に立てられ、本師の心聞曇貫の墓塔の傍らに存したことを伝えている。あるいは懷敏の遺骨も天童山のみでなく万年寺にも分骨され、曇貫や從瑾らの墓塔に沿うようなかたちで師資三代にわたって立石されたのかも知れない。

ところで、『扶桑五山記』一「天童住持位次」には、懷敏が示寂して以降の天童山の歴住について、  
廿三、虚菴敬禪師。廿四世、節禪師。廿五世、無用淨禪師。廿六世、息菴觀禪師。廿七世、浙翁琰禪師。

と伝えられている。懷敏の後席を継いで天童山の第二四世住持に就任した禪者は「節禪師」であったことが知られるが、この天童□節については如何なる系統の禪者であったのか、また道号や法諱の上字および事跡などが全く不明となっている。千仏閣を重修して天童山に大きな功績をなした懷敏の後席を継いでいるのであるから、あるいは節禪師が懷敏の法を嗣いだ門人であったか、同じ黄龍派に属する禪者であった可能性は高い。少なくとも節禪師は了朴・從瑾・懷敏と継承されてきた天童山住持の座を引き継いだのであり、十二世紀後半の天童山を久しく担ってきた黄龍派の禪者と深い関わりが存したと見るのは不自然ではなからう。栄西が亡き懷敏の墓前に門人などを使わせて礼祖塔の偈頌を奉納したとすれば、その時の住持は節禪師であったと推測される。

ついで天童山の第二五世となったのは大慧派の無用淨全（越州翁大木、一一三七—一二〇七）であり、この人は越州（浙江省）諸暨県の翁氏の出身で、世に越州翁大木と尊称されている。淨全は法兄の拙庵徳光に遅れて最晩年の大慧宗杲に参じて法を嗣いでおり、宗杲が示寂した後も同門の法兄らに歴参している。淳熙一六年（一一八九）に漸く淨全は通州（江蘇省）府治南一八里の狼山広教禪寺に開堂出世しており、その後、蘇州（江蘇省）呉県の承天能仁禪寺や宣州（安徽省）宣城県北五里の敬亭山広教禪寺さらに建康府（南京）飲虹橋南の鳳台山保寧禪寺などの住持を歴任し、最後に天童山に陞住している。『天童寺志』巻七「塔像攷」の「無用全禪師塔」に錢象祖（字は伯同、止庵居士）が撰した「塔銘」（正式には「天童無用禪師塔銘」）か）が収められており、そこには「天童適虚」席、四明首聞「師道儒」、亟馳「書迎」師。自「是法道逾行、衲子風趨」座下」と記されている。淨全は虚席となっていた天童山に明州府主の招請で入院していることから、おそらく節禪師が示寂して住持を欠いた際に天童山に陞住した

ものである。浄全が天童山に住持した時期は明確ではないが、おそらく十三世紀冒頭の頃と推測されるから、懐徹が示寂して浄全が入寺するまでの間、天童節が住持を勤めていたことになろう。その後、天童山の歴史の上で榮西ゆかりの黄龍派の禪者が再び住持として入寺することはなかったわけである。

### 「日本国千光法師祠堂記」の二つ

榮西に関する伝記史料として「日本国千光法師祠堂記」という短編の金石史料の写しが伝えられている。内閣文庫所蔵「禪林僧伝」一に「明菴西公禪師塔銘」とともに収められている。また『鄰交徵書初篇』巻一「宋」にも「清住院写本」として収められている。ちなみに清住院とは京都建仁寺に存する一山派の蘭洲良芳（弘宗定智禪師、一三〇五—一三八四）の塔頭にほかない。いま、両史料を対校して「日本国千光法師祠堂記」の全文を示すならば、およそつぎのようである。

日本国千光法師祠堂記。 虞樞。

太白名山甲天下、而千仏閣尤為第一。後世欲過之、其材無及焉。蓋柱植繇日本国僧千光法師所致也。詳見大參樞公閣記。宜為画像以祠。師諱榮西、備州人。孝靈賀陽氏、六十二世孫。母夢明星、感孕生。年十一出家、延曆寺雜髮染衣、初學俱舍婆娑論。十三受大戒、習天台教觀。掩関八年、以為未至、誓往西域求道。二十八、航海達四明、遊台山万年寺、礼石橋羅漢、淪茶現花、又見二青龍。俄頃尊者現全身、益堅素志、遂居之。会虚菴敞公移主天童、因与偕行。及建閣、即東還。願有以助之。越二載、大木果至而闢成、師之力也。師自幼敏悟、晚通唐朝内外典。持律終身、過午不食。本国賜号僧正、広修仏事、茲不具書。臨終預期、両手結印、安坐而化。寿七十五、臘六十二。後十年、其徒明全、復来山中、捐楮券千緡、寄諸庫、輒息、為七月五日忌、設齋飯、衆本孝也。全生伊州蘇姓、伝師之道、教戒亦精。入山三年、示寂於了然齋。火後得堅固子無數。付道元、藏歸故国、併刻于祠。

大宋宝慶元年八月九日、修職郎監臨安府都稅務虞樞記并書。陳祥刊。

この金石史料は宝慶元年（一二二五）八月九日に修職郎監臨安府都稅務の肩書きを持つ虞樞によつて記され、虞樞の直筆の文字が石工と見られる陳祥という人によつて石碑に刻まれたものらしい。その全文を書き下してみれば、つぎのようになろう。太白名山は天下に甲たり。而して千仏閣は尤も第一と為す。後世、之れを過ぎんと欲すれば、其の材、焉れに及ぶこと無し。蓋し柱植は

明庵榮西の在宋中の動靜について（下）（佐藤）

日本国の僧千光法師の致す所に係る。詳しくは大參の樓公の「閣記」に見ゆ。宜らく為めに像を画いて以て祠るべし。

師、諱は榮西。備州の人なり。孝靈賀陽氏六十二世の孫なり。母、明星を夢みて孕むを感じて生まる。年十一にして出家し、延曆寺にて雜髮染衣し、初め俱舎・娑婆論を学ぶ。十三にして大戒を受け、天台の教觀を習う。閔を掩うこと八年、以て未だ至らずと為し、西域に往きて道を求めんことを誓う。二十八にして海を航して四明に達し、台山の万年寺に遊び、石橋の羅漢を礼し、茶を瀹ゆて花を現じ、又た二青龍を見る。俄かの頃に、尊者、全身を現じ、益ます素志を堅くし、遂に之れに居す。虚菴敞公の移りて天童を主るに會い、因りて与めに偕に行く。閣を建つるに及んで、即ち東還す。願いは以て之れを助くるに有り。二載を越え、大木果たして至りて閣成る、師の力なり。師は幼きより敏悟にして、晩には唐朝の内外典に通ず。持律すること終身にして、午を過ぎて食せず。本国にて賜いて僧正と号し、広く私事を修むること、茲には具さに書せず。終わりに臨んで預め期し、両手にて印を結び、安坐して化す。寿七十五、臘六十二。後十年して、其の徒明全、復た山中に來たり、楮券千緡を捐て諸庫に寄せ、転息して七月五日の忌の爲めに齋を設けて衆に飯す、本孝なり。全は伊州の蘇姓に生まる。師の道を伝え、教戒亦た精し。山に入りて三年にして、了然齋に示寂す。火して後、堅固子を得ること無数なり。道元に付して、故国に歳婦し、併せて祠に刻む。

大宋宝慶元年八月九日、修職郎監臨安府都稅務の虞樛、記し並びに書す。 陳祥、刊す。

この「日本国千光法師祠堂記」は現存する榮西の伝記史料としては最も古いものであり、榮西に関する貴重な一代記を伝えている。また虞樛は樓鑰の「太白名山千仏閣記」の内容を十分に踏まえた上で「日本国千光法師祠堂記」を書き残している。ただし、石碑に刻むためか文章がきわめて限られており、内容面でも問題の箇所が多く存し、具体的な年時などは記されていない。榮西の二度にわたった入宋求法を一回のごとくにまとめてしまったため、二八歳で入宋する際に西域に求法せんとしたとし、四明に到ってそのまま天台山の万年寺を訪れたとする。もともと中心となるのは天童山の懷敞との関わりと千仏閣修造の一段であり、その功績を讃えるためにこの伝記史料が作成されたのである。この「日本国千光法師祠堂記」を虞樛に依頼したのは嘉定一六年(一二三三)に入宋した明全(仏樹房、一一八四—一二三五)であったが、明全が宝慶元年五月二四日に示寂したため、虞樛は明全の事跡を追加し、でき上がった記事を明全の門人であった道元に付与している。したがって、この「日本国千光法師祠堂記」の内容は、道元が納得した上で宝慶元年八月七日に石碑に刻まれたものと見てよく、虞樛の直筆を陳祥が刻み、千仏閣の一隅に榮西の画像とともに立石されたと伝えられる。「日本国千光法師祠堂記」がいつ頃まで天童山に残っていたかは

定かでないが、少なくとも南宋末から元代に天童山を訪れた多くの日本僧は千仏閣でこの石碑と榮西の頂相を目の当たりに拝していたはずである。また「日本国千光法師祠堂記」の文面は道元によって拓本などのかたちで日本に齎されたものと見られ、その文面のみは後世へと伝えられて現今に知られる。

### おわりに

以上、榮西の二度に及ぶ在宋中の動向を一通り整理してきたわけであるが、これらを通して見ると、榮西は在宋中には阿育王山弘利寺や天台山万年寺さらに天童山景德寺といった東浙を代表する禅刹を経巡り、住持の禅僧や門下の修行僧らと頻繁に交流をなしていたことが知られ、南宋禅林に対してはかなり禅僧としての面を強調していたものと見てよいであろう。

第一次の入宋は滞在わずか半年間という短期に限られており、榮西としては悔いを残したかたちで帰国しており、満足の行く成果は得られなかったといえよう。ただし、重源とともに阿育王山の仏舍利塔や天台山の勝景を巡ることを得、帰国して後は重源とともに阿育王山の舍利宝塔の修復に荷担しているものと見られる。第二次入宋では実に五年間に及ぶ長期の研鑽ができたわけであり、その間、実地に天台山万年寺や天童山景德寺で虚庵懐敏のもとで着実な参禅学道を行ない、正式に法を嗣いだ高弟として印可証明を受け、臨済宗黄龍派の法統を日本に伝えることとなった。また榮西は在宋中や帰国直後には多くの私財を投じて万年寺伽藍や天童山千仏閣の修復に尽力しており、勧進僧としての面目躍如たるものが存している。日本禅宗の二十四流四十六伝の中で臨済宗黄龍派を伝えたのは榮西のみであり、十二世紀末葉に榮西によって辛うじて黄龍派が日本に導入された意義は大きいであろう。

榮西が日本において禅僧の肩書きで活動し得たのは第二次入宋から帰国して以降の晩年二〇余年に限られている。それ以前は禅に関心はあっても禅宗の嗣承が存しなかったのであるから、当然のことながら榮西は天台僧・密教僧としてのみ活動しており、禅僧として活動することなどあり得なかったわけである。しかも榮西自身が『未来記』に語っているごとく、自身の時代にはいまだ禅宗を積極的に前面に押し出すことなく、天台・密教を兼修したかたちで教えを説くに留まっている。榮西が五〇年後に托した禅宗興隆に対する思いは、破庵派（聖一派祖）の円爾や松源派（大覚派祖）の蘭溪道隆（大覚禅師、一一二三—一二七八）らの活動によってやがて開花することとなる。<sup>28</sup>

註

(1) 慈航了朴の活動については、桐野好覚「慈航了朴の逸文——『永平広録』と『先徳語録』の記載を端緒として——」（曹洞宗総合研究センター・宗学研究部門『宗学研究紀要』第一七号、二〇〇四年三月）を参照。了朴の示寂年時については明確ではないが、『明州阿育王山統志』巻一「先覚攷（補遺）」に「第二十二代、慈航朴禪師（二月初八日忌）」とあるから、忌日が二月八日であったことが知られる。密庵咸傑は淳熙十一年（一一八四）一月に天童山の請を受けて入寺しており、それ以前にすでに了朴は天童山の住持を退住していたものと見られ、あるいは淳熙十一年二月八日に示寂しているものかも知れない。

(2) 普門從廓（妙智禪師）の活動と日本仏教との関わりについては、拙稿「阿育王山の妙智禪師從廓について——平安末期の日本仏教界との関わりを踏まえて——」（駒澤大学禅研究所年報『第二三号、二〇一一年一二月』）を参照。また十二世紀後半から十三世紀の阿育王山と日本仏教との関係については、拙稿「阿育王山広利寺と中世初期の日本仏教」（曹洞宗総合研究センター『学術大会紀要』第一四回、二〇一三年六月）を参照。

(3) 史浩の詩文集である『鄮峰真隱漫録』卷三五「贊」には、  
永嘉長住「長蘆」心聞實師真贊。

清清冷冷、如「風過」耳。灑灑落落、如「月在」水。其孤標逸、  
韻真可廉。貪而律鄙、若夫道之在「天下」、歷「千古」而不「死」。

又何必視「幻影於断縑」、鑽「遺言於故紙」。嗚呼、是為「長靈之孫、無示之嗣」、後学之師、心聞老子。

とあるから、温州永嘉県の出身で久しく真州の長蘆寺の住持を務めた曇貫の頂相に対し、史浩が贊を寄せたものであろう。『続開古尊宿語要』第四集に所収される「心聞貫和尚語」の「上堂」によれば、曇貫は自称として「瑞巖」「龍翔」「長蘆」「万年」を用いているから、台州の瑞巖浄土院に開堂出世した後、温州の江山心龍翔寺に久しく住持し、真州の長蘆崇福院に遷住し、最後に天台山の万年寺に住持していることになろう。

(4) 『黄龍十世録』の「天童雪庵從瑾禪師」の箇所には、

天童雪庵從瑾禪師、將「示」滅時、書「偈」于天童山松石上云、  
山川有「限」死無「窮」、死後深埋「向」此中、我亦不「知」誰是我、  
鬪「讎」日夜聽「松風」。

雪庵衰老深藏「拙」、危「坐蒲团」無「法説」、莫怪相逢横「面皮」、  
從來不「解」順「毛」捋。「智窮」不「到处翻」身、海底珊瑚湧「月輪」、  
剔「起眉毛」高著「眼」、鉄鞭驚走玉麒麟。

延寿海上人求「頌」。白岩雪庵從瑾書。

というわずかな記事が存しているにすぎない。最初の偈頌は、從瑾が示寂に臨んで示した遺偈に当たるものであり、これによれば、從瑾は天童山で松石の上に「山川は限り有るも死は窮まり無し、死して後、深く此の中に埋向む。我れ亦た知らず、誰

か是我れなる。鬪鬪は日夜に松風を聴く」という遺偈を書して示寂したものらしい。ただし、從瑾が天童山で遺偈を残して示寂したとすると、逆に万年寺との関わりが曖昧となってしまう。あるいは万年寺で示寂した記事が『黄龍十世録』の編纂の段階で天童山のごとく書き改められたものかも知れないし、天童山で示寂して万年寺に葬られたとも解されようか。いま一つの偈頌は、延寿□海という上人が頌を求めたのに応じて從瑾が記したものであり、「雪庵、衰老して深く拙を蔵し、蒲団に危坐して法の説く無し。怪しむこと莫かれ、相違うて面皮を横にすることを。從來、毛に順いて捋るを解せず」と「智も窮め知らざる処に身を翻し、海底の珊瑚、月輪に湧く。眉毛を剔起して高く眼を著くれば、鉄鞭にて驚き走る、玉麒麟」という二首の頌を詠じている。延寿海上人が如何なる禪者であったのかは定かでないが、從瑾の門人であったと解すべきであろう。また從瑾の肩書きとして「白岩」とあるが、これも從瑾が住持した禪刹の一つであったと見られ、白岩とはおそらく台州臨海県西一二里（または臨海県西北十四都）に存する白巖山（もと白馬山）の白巖禪寺のことであろうか。あるいはこれらの偈頌も黄龍派の龍山徳見が在元中に天童山その他で入手した從瑾の墨蹟であったのかも知れず、『黄龍十世録』に書されたことよって、辛うじて現今に知られる貴重な内容であろう。別に從瑾には『雪庵從瑾禪師頌古集』一卷が存し、三五則の古則公案に対して頌

明庵栄西の在宋中の動静について（下）（佐藤）

古が付されており、とくに「黄龍三関」の古則に対しては四首の頌古が載せられている。

(5) 『攻媿集』巻八一「贊」に「雪菴瑾老贊」として、

俊辯不窮、靈臺無比。菴空無人、雪消成水。若道成水、流転未已。一点洪爐、永超生死。

とある。「菴空にして人無し」とあるから、從瑾が鹿園庵で示寂して後、樓鑰が從瑾の頂相に対して祖贊を寄せたものである。

(6) 『兩浙金石志』巻九「宋」の「宋故宏智禪師妙光塔銘有叙」に、

其任天童、前後幾三十年、寺為一新。即三門為大閣、広三十楹、安奉千仏。又建盧舍那閣、旁設五十三善知識、燈鑑相臨、光景互入。

とあり、宏智正覚が天童山に住持すること三〇年に及び、この間、寺宇を一新したことを伝えている。とくに三門を大伽藍となして千仏を安置し、また盧舍那閣を建てて傍らに五十三善知識を設置したことを伝えている。

(7) 『出家大綱』一冊は、栄西が第二次の在宋中に構想を練った持戒持斎を勧める著述であり、建久六年（一一九五）一〇月一日に自序が叙され、正治二年（一二〇〇）正月六日に再治がなされている。駒澤大学図書館や建仁寺両足院には寛政元年（一七八九）に刊行された江戸刊本が所蔵されている。

(8) 『続古今和歌集』は『二十一代集』第五に所収されているものを使用した。

(9) 『秘宗隱語集』一帖は、栄西が南宋の紹熙元年（日本の建久元年、一一九〇）九月に再治したものであり、大東急記念文庫に所蔵されている。

(10) 鎌倉の鶴岡八幡宮に所蔵される神奈川県指定文化財「長命富貴堆黒箱」については、平成二二年（二〇一〇）九月発刊の福岡市博物館編『栄西と中世博多展』に「長命富貴堆黒箱（栄西に贈られたお目出度い箱）」として写真が載せられ、南宋時代（十二世紀）のものとして解題が付されている。ただし、金国の明昌元年（一一九〇）の年号が記されている理由は不明としている。

(11) 伊藤松著『鄰交徵書』は国書刊行会から昭和五〇年（一九七五）八月に刊行された影印本を使用した。『宋詩紀事補遺』巻九七と『全宋詩』巻二五七三の二九八八にも懐敵の偈頌を載せているが、いずれも『鄰交徵書』の記載を受けるものである。

(12) 法燈派の高山慈照とその塔頭である靈洞院については『扶桑五山記』四「山城州東山建仁禪寺」の「諸塔」に「由良派」として「靈洞院（高山禾上）」とあり、同じく「住持位次」にも「廿六、高山禾上、諱慈照。嗣法燈。諡廣濟禪師。洛陽人、姓菅氏。塔于靈洞菴」と伝えている。また慈照の伝記史料としては、大慧派の楚石梵琦（曇耀、西齋、仏日普照慧辯禪師、一二九六一—一三七〇）が撰した「日本国京師建仁禪寺高山照禪師塔銘」が存しており、『名僧行録』二上、『禪林僧伝』一、『禪林諸祖伝』四および『統群書類従』第九輯下などに収められている。

(13) 『鄰交徵書初篇』巻一「宋」にも「附法千光法師書」として、  
附法千光法師書。懐敵（虚菴）。

日本国千光院大法師西、宿有靈骨、頓捨世間深重恩愛、  
從仏剃髮、著僧伽梨、洪持此法、不遠万里、航海而入我炎宋、探蹟宗旨。乾道戊子年、遊天台、見山川国土勝妙道場清淨殊特、生大歡喜。嘗施淨財、供十方学般若菩薩。已而至石橋、拈香煎茶、敬礼住世五百大阿羅漢。尋復本国、夢境恰恰二十年、雖音問不聞、而山中老宿、歷歷記其事。今又懷旧遊復之、宿縁不淺、志愆一操、茲深不示法旨。夫昔釈迦老人、將欲円寂時、以涅槃妙心正法眼藏、付屬摩訶迦葉、乃至嫡嫡相承、至於予。今以此法付屬汝、汝當護持。佩其祖印、歸國布化末世、開示衆生、以繼正法之命。又授汝袈裟、大師昔伝衣為法信、而表本来無物。然至六祖衣止不伝、云云。其風雖絶、今為外国法信、授汝僧伽梨而已。又授菩薩戒、拄杖・応器・衲子道具、不留一付屬畢。聞伝法偈、云云。（栄西、字明菴、一字葉上、諡千光国師。建仁寺開祖。仁安文治之間、再入宋、嗣法虚菴。本文、本朝高僧伝塔銘等、大同小異。興禅護国論と載せられており、これを書き下すならば、つぎのごとくならう。  
法を千光法師に附する書。懐敵（虚菴）。

日本国千光院大法師西、宿に靈骨有り、頓に世間の深重な



る恩愛を捨て、仏に従いて髪を剃り、僧伽梨を著し、洪いに此の法を持し、万里を遠しとせず、海を航して我が炎宋に入り、宗旨を探蹟す。乾道戊子の年、天台に遊び、山川国土の勝妙なると道場の清淨殊特なるを見て、大歓喜を生ず。嘗て淨財を施し、十方の学般若の菩薩に供す。已にして石橋に至り、香を拈じて茶を煎じ、住世の五百大阿羅漢を敬礼す。尋で本国に復り、夢境、恰恰として二十年、音間の相い聞かずと雖も、而も山中の老宿、歴歴として其の事を記す。今、又た旧遊を懐いて之れに復る、宿縁は浅からず、志慙（一に操）は茲に深し。法旨を示さざるべからず。夫れ昔、釈迦老人、將に円寂せんと欲する時、涅槃妙心正法眼藏を以て、摩訶迦葉に付属す、乃至、嫡嫡相承して予に至る。今、此の法を以て汝に付属す、汝当に護持すべし。其の祖印を佩び、国に歸りて化を末世に布き、衆生に開示し、以て正法の命を継げ。又た汝に袈裟を授く、大師、昔、衣を伝えて法の信と為して、本来無物なるを表わす。然して六祖に至りて衣止まりて伝わらず、と云云。其の風、絶つと雖も、今、外国の法の信の爲めに、汝に僧伽梨を授くるのみ。又た菩薩戒を授け、拄杖・心器・衲子の道具、一を留めず付属し畢わる。伝法偈を開け、と云云。

〈榮西、字は明菴、一に葉上と字し、千光國師と諡す。建仁寺の開祖なり。仁安・文治の間、再び入宋し、法を虚菴

明庵榮西の在宋中の動靜について（下）（佐藤）

に嗣ぐ。本文は、本朝高僧伝・塔銘等、大同小異なり。興禪護國論。

〔14〕館隆志「榮西の『未來記』と蘭溪道隆」〔駒澤大学禅研究所年報〕第二五号、二〇一三年二月の「榮西の禅宗初祖としての評価」〔日本における禅宗の初祖と最初の禅寺〕の項を参照。

〔15〕東福寺の円爾（辨円、聖一國師、一二〇二—一二八〇）が日本に將來した『仏祖宗派総図』によれば「杭州径山妙喜宗杲（宣州奚氏）」の法嗣の一人に「興化軍石泉□詠」の名が載せられているが、あるいはこれが『大慧普覺禅師年譜』を撰した祖詠を指すのであろうか。ちなみに興化軍とは宋代に泉州（福建省）の莆田県・遊洋県・興化県に置かれた軍であり、石泉とは寺院名と見られる。

〔16〕『仏祖統紀』卷五四「歴代会要志第十九之三」の「鄞山舍利」に、梁末帝吳越王錢鏐、遣弟鍾往、迎育王山舍利塔、夜放光明、浙江如昼。

として阿育王山の舍利塔が光明を放った記事を伝え、同じく「鄞山舍利」の項には、

寺東一里有聖井靈鰻。欲出則有二紅蟹、若前驅者。錢武肅王、迎塔至錢唐、夢一菩薩首戴結縵華冠、兩掖扶蟹云、是育王聖井靈鰻、來護塔耳。（已上並見寧僧統所撰舍利塔伝・靈鰻伝）。

とあり、阿育王山の舍利塔を守護する聖井靈鰻菩薩のことが記

されている。

(17) 越州(浙江省)紹興府に関する南宋代の地志である『嘉泰会稽志』巻八「寺院」の「上虞県」には、

興教禪院、在<sub>二</sub>県西南四十里<sub>一</sub>。唐乾符六年建、号<sub>二</sub>建福院<sub>一</sub>。天祐三年、吳越改<sub>二</sub>象田禪院<sub>一</sub>。太平興国九年、改賜<sub>二</sub>今額<sub>一</sub>。

と記されており、象田山興教禪院(象田寺)が越州上虞県西南四五里に存していることを伝えている。同じく『嘉泰会稽志』巻九「山」の「上虞県」には「象田山、在<sub>二</sub>県西南四十里<sub>一</sub>。周四十餘里、山平衍、俗呼<sub>二</sub>小天台<sub>一</sub>。南有<sub>二</sub>舜井<sub>一</sub>」と記されている。

(18) 台州(浙江省)に関する南宋代の地志である『嘉定赤城志』巻二七「寺觀門」の「臨海(教院)」に、東掖山の能仁寺について、

能仁寺、在<sub>二</sub>県東北四十五里<sub>一</sub>。旧名<sub>二</sub>承天<sub>一</sub>、元符二年建。有<sub>二</sub>九祖閣・羅漢堂<sub>一</sub>。政和七年、改<sub>二</sub>今額<sub>一</sub>。嘉定十四年、御<sub>二</sub>書寺扁及藏額八字<sub>一</sub>。今<sub>二</sub>觀閣奉<sub>一</sub>焉。側有<sub>二</sub>普同塔<sub>一</sub>、蓋紹興中僧法照掩<sub>二</sub>遺骸<sub>一</sub>処。

と記されており、同じく東掖山の白蓮寺に関しては、

白蓮寺、在<sub>二</sub>県東北四十五里<sub>一</sub>。旧名<sub>二</sub>白蓮庵<sub>一</sub>、慶歴五年、僧本如建。魏国大長公主請<sub>二</sub>今額<sub>一</sub>。旧有<sub>二</sub>十六觀堂<sub>一</sub>。嘉定十年、御<sub>二</sub>書扁額四字<sub>一</sub>以賜、仍改<sub>二</sub>院為<sub>一</sub>寺。按、智觀教起<sub>二</sub>天台仏龕<sub>一</sub>、而白蓮能仁宗而闡<sub>レ</sub>之、号<sub>二</sub>東掖両山<sub>一</sub>云。

と記されているが、いずれも普賢菩薩の放光の逸話については何ら伝えていない。

(19) 孝宗と禪宗については、石井修道「孝宗(南宋)と禪宗―道元の南宋禅林観と関連して―」(『宗学研究』第二四号、一九八二年三月)に考察が存している。

(20) 『攻媿集』巻五七「記」の「天童山千仏閣記」については、石井修道「中国の五山十刹制度の基礎的研究(一)」(駒澤大学仏教学部論集)第一三号、一九八二年一〇月)に「資料二」天童山千仏閣記(楼鑰)」として、翻刻と書き下しが載せられている。

(21) 『天童寺志』巻二「建置攷(宋)」の「(光宗)紹熙四年」の箇所にも「参政攻媿宣猷楼鑰千仏閣記」として「天童山千仏閣記」が載せられているが、誤字脱字がきわめて多いことから、本稿ではあえて考察の対象とはしなかった。

(22) 京都国立博物館編『建仁寺両足院聖教目録I』には、第六〇函に収められたものの一つに、

「天童山千仏閣記」(写本) 一帖(21号)

(江戸時代前期)・袋綴装・(四穴仮綴)・6丁・楮紙打紙・法量(縦28.0cm×横19.8cm)・共紙表紙・原表紙・本文(漢字)・半葉9行・一行17字

「外題」「天童山千仏閣記」(外題直書)

「首題」「太白名山千仏閣記」

「尾題」なし

と記されており、江戸前期に書写された「天童山千仏閣記」の写本が残されていることが知られる。外題が「天童山千仏閣記」

とあり、首題が「太白名山千仏閣記」と記されている。この兩足院本は江戸時代前期の筆写とされるから、『隣交徵書初編』に書写収録されたものより以前に東福寺に所蔵されていた拓本から直に書き写されたものであるが、いまだ兩足院本の内容は確認していない。

- (23) 天保八年(一八三七) 九月二七日の火災の翌年、天保九年(一八三八) 仲夏五月に仁科幹(字は礼宗、号は白谷、一七九一—一八四五)の『隣交徵書序』が付され、天保十一年(一八四〇) 孟冬一〇月に伊藤松の編集した『隣交徵書』が上梓されているから、火災の記事はきわめて信憑性の強いものである。

- (24) 『延祐四明志』巻一七「釈道攷中」の「鄞県寺院(禪院)」の「天童山景德寺」の項においては、

紹興初、宏智禪師、撤而新之。淳熙十六年、僧懷敏建千仏閣。日本僧榮西、從敏遊、歸其国、致百圍之木以來。と簡略に記されており、やはり日本僧榮西が百圍の材木を天童山に送ったことが記されているが、千仏閣の完成した年時については触れられていない。

- (25) 『攻瑰集』巻九「今体詩」には、天童山の東方にある東谷庵を拝登した際に詠じた「東谷」の詩につづいて、「千仏閣」と題して、  
平横雲棟塞空虛、倒影仍臨碧玉壺。千仏威光歸宝所、  
九霄宸藻祭河図。人天共歎未曾有、燕雀相驚不敢踰。試問南詢童子看、化城曾見此樓無。

明庵榮西の在宋中の動静について(下)(佐藤)

という詩が載せられている。千仏閣が修復された後、樓輪は東谷庵を訪れて曹洞宗の宏智正覚の墓塔を拝し、さらに完成したばかりの千仏閣を目の当たりにして詩を詠じたものであろう。

- (26) 大慧派の無了派については、拙稿「天童山の無了派とその門流—道元が入宋して最初に参学した臨濟禪者—」(駒澤大学仏教学部論集)第三九号、二〇〇八年一〇月)を参照。

- (27) 『日本国千光法師祠堂記』に関する詳細は、拙稿「仏樹房明全について」(宗学研究)第三三号、一九九一年三月)と「仏樹房明全伝の考察」(駒澤大学仏教学部研究紀要)第四九号、一九九一年三月)と「明全—入宋求法の志半ばに倒る—」(至文堂『国文学・解釈と鑑賞—特集道元の世界・生誕八百年のいま—』一九九九年一二月号(第六四卷二二号)に所収)などを参照されたい。

- (28) 『建長寺和漢年代記』の建保三年(一一二五)の箇所にも、  
積榮西、在相州龜谷、營壽福寺。一日辭源僕射実朝、即命駕飯京。六月、告衆曰、孟秋單五、吾之終也。都下喧、至宸辰。到期、上遣使問候。西对宮使、晡時坐椅、安祥而逝、実七月五日也。年七十五。嘗曰、我没五十年、禅宗大興於世。文応・弘長以来、爾于慧日、隆于巨福、皆如西之言。二師又領建仁、可謂奇中乎。

という記事が載せられており、榮西の『未来記』を踏まえて、その最期と五〇年後の禅宗隆盛が語られている。

【栄西在宋中の関連系図】

〔臨済宗黄龍派〕

黄龍慧南

晦堂祖心

靈源慧清

長靈守卓

無示介諶

心聞曇貴

雪庵從瑾

虚庵懷敏

明庵栄西

草堂善清

野堂普崇

真浄克文

湛堂文準

典牛天游

塗毒智策

古月道融

明庵栄西—退耕行勇—大歇了心

釈円房栄朝

蔵叟朗誉

寂庵上昭

龍山徳見

無等以倫

仏樹房明全

仏法房道元

雲叟慧海

寒潭慧雲

覚庵充本

〔臨済宗楊岐派〕

楊岐方会—白雲守端—五祖法演

圓悟克勤

大慧宗杲

大円遵璞

妙智從廓

開元宜意

拙庵徳光

秀巖師瑞

石泉祖詠

大日房能忍

仏眼清遠

雪堂道行

晦庵慧光

蒙庵元聡

我禪房俊苐

〔曹洞宗〕

投子義青

芙蓉道楷

丹霞子淳

真歇清了

大休宗珏

足庵智鑑

長翁如浄

宏智正覚

大洪法為

広慧法聡